

寝坊すけ先輩と 後輩めざまし君

R-18



ENG
WORKS NO. 02

寝坊すけ先輩と後輩めざまし君

第一章

その騒音は15分待っても鳴り止むことはなかった。

仕方なく自室を出ると、向かいの部屋のドアを開けて中へ入る。部屋の中はけたたましい阿鼻叫喚の嵐だ。俺はわめき続ける奴らの息の根を片っ端から止めてゆく。窓際にずらりと並んだ連中を緘黙させ、次に床を転がり回る厄介者たちをとっ捕まえては、容赦なくその命脈を絶つ。最後に高い壁からこちらを見下ろすラスボスを光線銃で撃ち殺すと、ようやく辺りに静寂が戻ってきた。そしてこの騒動にもまったく目を覚ますことなく、悠然と寝息を立てている部屋の主の肩を揺すると、耳元でこう怒鳴った。

「ホースケ先輩、朝です起きて下さい!!」

俺の名は沖田一起^{オキタカズキ}、今年の春に大学を卒業して社会人の一年目だ。そして目の前で眠り続けるこの男は寝屋川抱輔^{ホウスケ}、同じ職場に勤める二つ上の先輩である。ここはうちの会社の独身寮で、俺を含めて20人余りの若手男性社員が共同生活を送っていた。

会社での寝屋川先輩は仕事もバリバリこなし、明るく面倒見も良い人柄で皆に慕われている。童顔で小柄な事もあって、事務のおばちゃんたちからは「ホーちゃん、ホーちゃん」と可愛がられており、そのせいで後輩である俺までもが「ホースケ先輩」と呼ぶ。

仕事上では非の打ちどころの無いホースケ先輩ではあったが、彼には一つ重大な欠点があった。もうお気付きかと思うが、先輩は朝が弱かった。十数台の目覚ましをセットしていても、そのアラームの嵐の中でぐっすり眠り続けられる特技の持ち主だ。

そしてこの寮に入寮した次の日から、彼を叩き起こすのが俺の任務となった。配属先が同じで部屋が向かいという格好の条件を満たす俺にお鉢が回ってきたのは、まあ至極当然の成り行きではあった。

「先輩また遅刻しますよ、起きて下さいっ!」

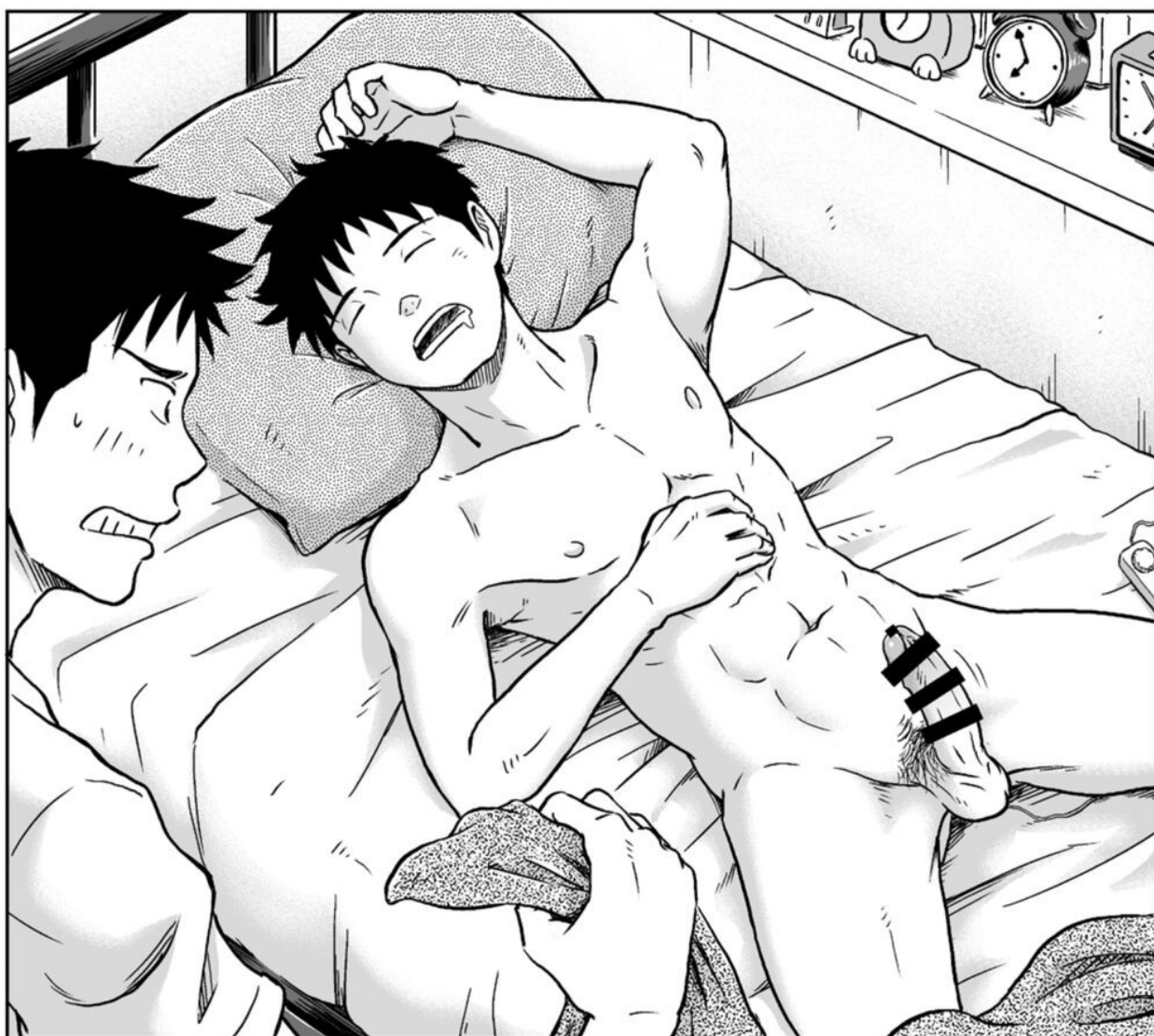
強く身体を揺さぶってみても、彼はムニヤムニヤ言うだけでまったく目覚める気配が無い。止む無く強硬手段に出る事にする。奴の包まる巣材の端をグイと掴むと、

力一杯引いて布団をむしり取った。

「うっ……」

俺は思わず唸ってしまった。何故ならホースケ先輩は素っ裸だったからだ。どうやら彼は裸族の傾向があるようで、週に一度はこうして全裸になっている。一応Tシャツとパンツを身に着けて就寝はするものの、寝ている最中に全部脱いでしまうらしい。ホースケ先輩の股間で、元気良くおっ勃った「アサダチンポ」がピクピクと揺れていた。

まあな、こればかりは男の生理現象だから仕方ない。共同風呂で先輩の裸は散々見ていたし、こんなのは日常茶飯事だったから、もうすっかり慣れっこだ。男ばかりの独身寮では他の連中もその辺は割と大らかなのだが、それでも一応先輩の名誉のため、優しい俺はこっそり毎回パンツを穿かせてから彼を起こすよう



にしている。この日も仕方なく、行方不明のパンツを探してベッドの周囲を搜索する次第となった。

その最中、俺はふと先輩の股の間から電気コードのよ
うなものが這い出しているのに気がついた。コードの
先にはダイヤル式のコントローラらしき物が付いてい
る。えっ、これってもしや……アレじゃねえのか？

「んん……」

布団を剥がれ、肌寒くなったらしい先輩が寝返りを
打って丸まった。こちらに向けられた尻の穴に、シリコ
ン素材っぽい半透明の物体が嵌り込んでいた。いわゆる
大人のオモチャ……ローターとか電動デイルドとか、多
分そんな感じのやつだ。俺は思いがけず先輩の秘められ
た性癖を知ってしまった、少し動揺した。この状況、一体
どうすりゃいいんだ？

ふと傍にあつたゴミ箱の中身が目に残る。昨夜生産
されたらしい新鮮なザーメン・ティッシュが投げ込まれ
てあつた。おそらく寝る前にオナニー……いや、アナニー
で慰めた後、そのまま眠り込んでしまったのだろう。

俺は思案した。このまま先輩を起こさない訳にもい
かないし、かと言ってこの状況を上手く隠蔽してやるのも
不可能だ。さすがに尻に突っ込まれたブツを引っこ抜く
勇気は無い……そして最早どうにもならないのならば、
いつその事ちよつと悪戯して楽しんでやろうという気にな
つた。毎朝厄介なモーニングコールをしてやってるん
だから、その位の役得はあってもいいだろう？

俺はドキドキしながらリモコン・スイッチのダイヤル
をオンにしてみた。「ウィンウィンウィン……」とい
う大きめのモーター音と共に、オモチャの根元部分が芋
虫のようにくねくねと動き始める。「ん……っ」という
呻き声と共に先輩の顔が歪み、意識下では尻の異変を感
じ取っているらしい。

ダイヤルのボリウムをゆっくり回し、最大にまで上
げると、ホースケ先輩の様子は明らかに変化を見せた。
「は……アン……ンッ」と色っぽいエロ声をあげながら、
明らかに快感を得ているようだ。尻のオモチャはグイ
ングインと弧を描いて暴れており、内部は掻き回されて
さぞや大変なことになっているらしいのがわかる。先輩



はうつ伏せになって枕を胸に抱きしめると、腰を振ってシートにチンポをこすり付け始めた。俗にいう、床オナッてやつだ。

先輩の腰の動きは徐々に激しさを増し、シートにチンポを突き立ててファックし始めるまでになった。肌が汗ばみ、呼吸も早くなつてゆく。このままだとじきに達してしまいそうな勢いだ。というか、ここに至ってもまだ目覚めないのがすごい。

俺はこの辺で止めておくべきか若干の躊躇を覚えたが、やはり事の結末を見届けたいという好奇心の方が勝ってしまった。オモチャの根元を掴んで固定してやると、支点を得た事で内と外へ分散していたクネクネ運動のパワーが全て彼の直腸へと伝わる事態となった。

「ア……アア……アアッ」

先輩から明らかなヨがり声があがる。枕をきつく抱きしめ、身体をのけぞらせてピンと脚が伸びた。よし、最後の一押しだ。俺はオモチャをグツと奥へ押し込んだ。

先輩の身体は「ひぐッ……!!」という呻き声と共に激しく痙攣を始めた。肝心の部分はシートに押し付けられ

ていて見えなかったが、夢精しているのは明らかだ。射精のポンピングに合わせて尻えくぼが弛緩し、括約筋がキュウキュウ締め上げられているのが、支えていたオモチャ越しに伝わってくる。

結構長めの射精運動が終わると、ホースケ先輩の身体から力が抜けてぐったりとなった。そして瞼がゆっくりと開くと、寝ぼけ眼の先輩は身体を浮かせてぼんやりとその部分を確認する。そこは当然、精液でべっとりだ。シートと腹筋、まだガチガチのチンポの間に幾筋ものデロデロが尾を引いていた。

それを見た彼は「やべっ」と小さく呟くと、次にアナールで暴れ続けている存在に気付いて慌てて尻に手を延ばす。そしてその拍子にベッド脇に佇む俺と視線がかち合い、「おわっ!!」という悲鳴と共に飛び上がった。

「おまつ、おまつ、ここで何してんだよっ」

尻と股間を必死で隠しながら慌ててリモコンのスイッチを切ろうとわたわたしていたが、焦って何度も取り落とす狼狽振りだ。俺は努めて冷静に、そっけない風を装っ

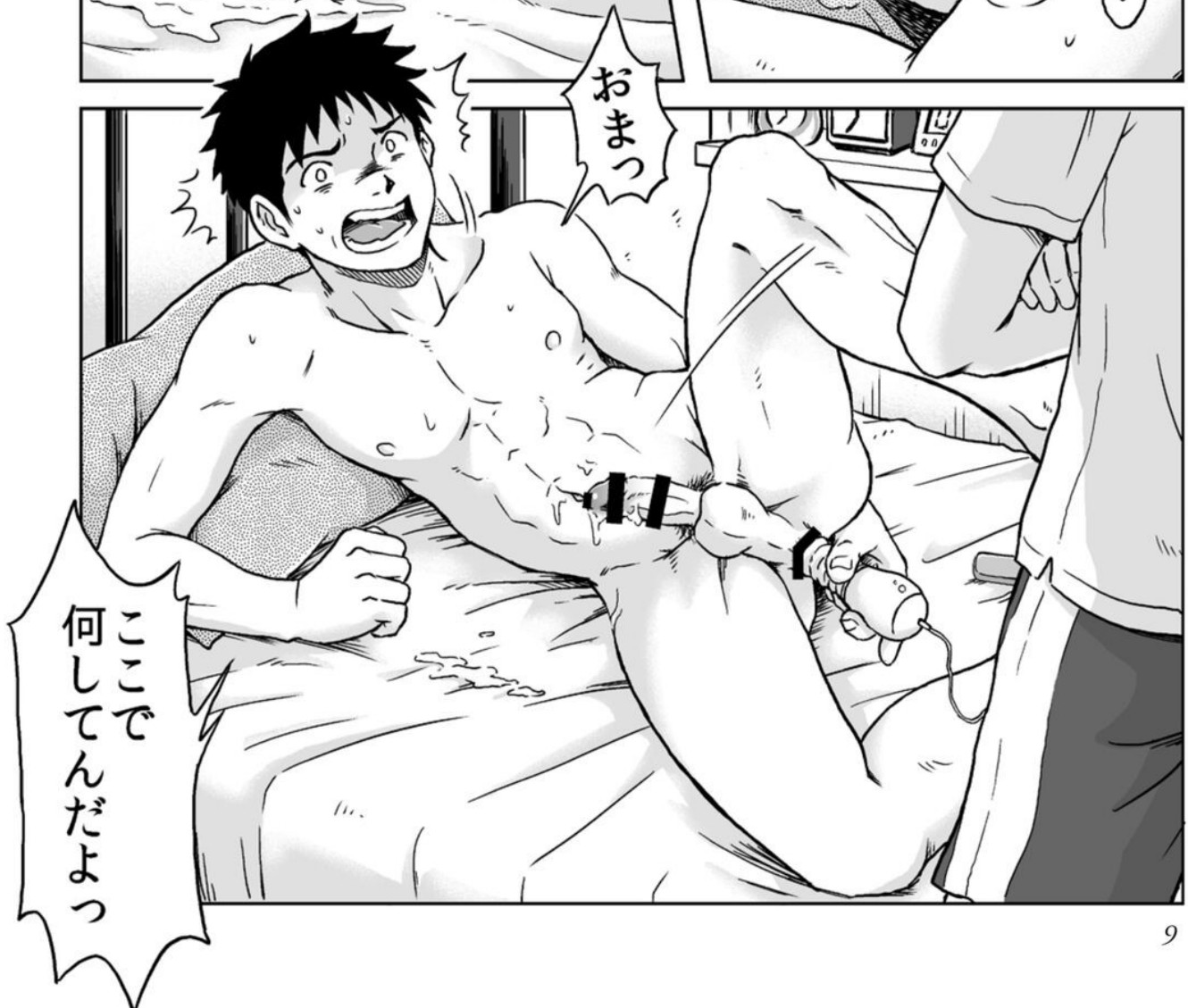
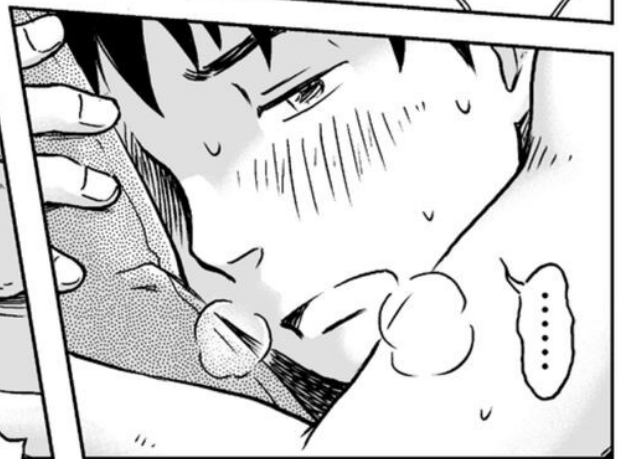
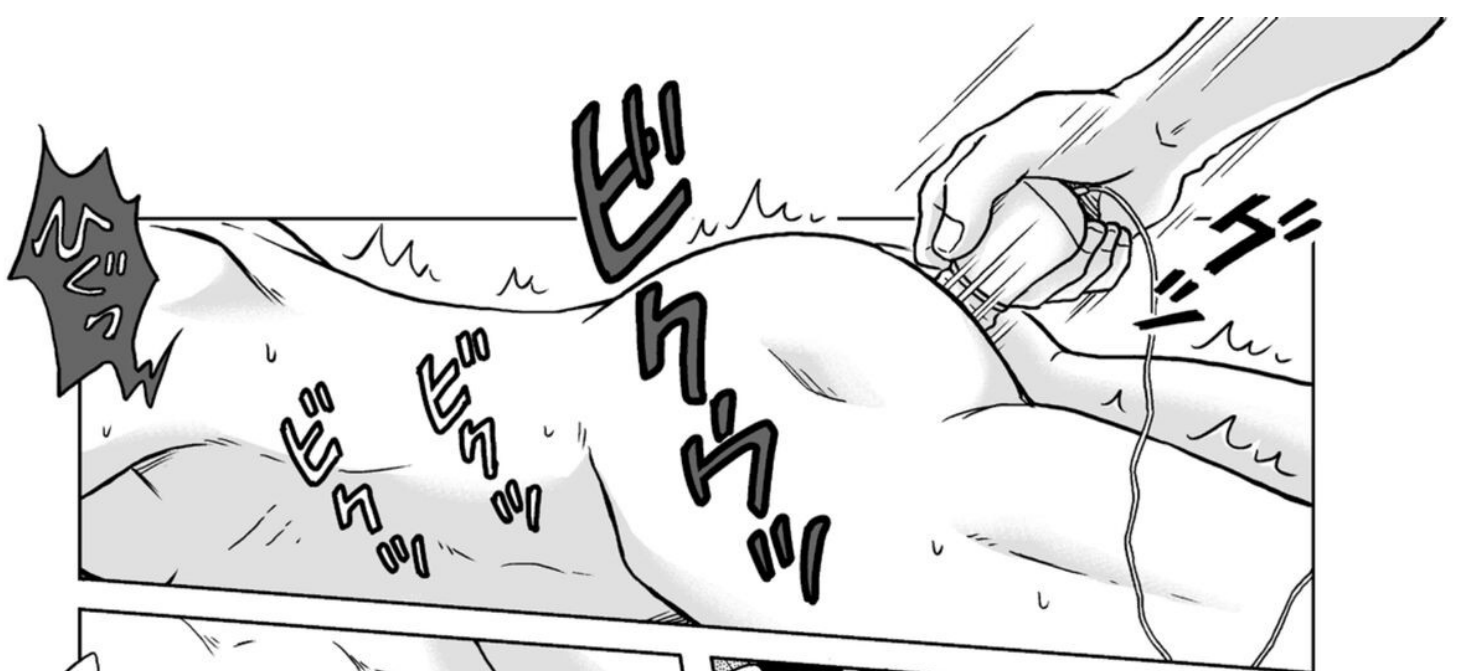
て言った。

「もう朝なんで起きて下さい。布団めくつたらなんか楽しそうな事になってたんでスイッチ入れてみたんですけど……あ、シート洗うなら早くしないとマジで遅刻しますよ」

先輩は血の気の退いた顔で金魚みたいにパクパクと口を開いたが、何の言葉も出ては来なかった。そりゃそうだろう。もし逆の立場だったら、この状況で何を言えばいいのか俺だってわからない。肩を小刻みに震わせながら俯く先輩をちよつと可哀そうに思いながら、俺はそのまま部屋を出て自室に戻った。



案の定、先輩は一時間遅刻して出社してくる羽目になった。同僚たちが「あれ、どうしたの？ 最近はずつと無遅刻だったのに」と声をかけたが、ホースケ先輩は「いやあ……ちよつと」と真っ赤になりながら誤魔化していた。そして俺の方は一切見ずに自分のデスクに着くと、元気無い様子で仕事に取り掛かる。結局、午前中



の間はそのまま特に言葉を交わすことも無く過ぎていった。

昼休みになり、社食へ向かおうと席を立った所で先輩が決まり悪そうにやって来た。

「……お、沖田、良かったら外へ食いに行かないか？

オレが奢るからさ」

「はあ、いいんですか？」そう答えると、先輩は重い足取りで俺の前を歩き、会社の外へと連れ出した。

連れられて来たのは、そこそこ高級な焼き肉店だった。半個室の席に案内されると、先輩が店員にオーダーを入れる。お得なランチメニューではなく、和牛特選上カルビとかそういうお高い系の奴だ。俺が滅多に食えない高級肉を炭火に並べていると、先輩が急に畏まって頭を下げる。

「けっ、今朝は変なものを見せて悪かったっ！」

正直、俺の方も少々申し訳ない気持ちになっていた。今朝のハプニングは、先輩のキャラならもつと悪ふざけ的なノリで済むかと思っていたので、こんなに落ち込まれるとは思っていなかったからだ。

「いや、別にいいっすよ。誰にも言ったりしませんし、それにこういうの、今回が初めてって訳でも無いんで……」

「えっ」先輩の顔がさらに青ざめる。

「あ、いや、今朝ほどじゃ無いですけどね。ホースケ先輩、寝てる時に脱ぎ癖があつて、よく全裸になってるんですよ……いつも起こす前に俺がパンツ穿かせてたんすけどね」

「ま、マジで？」

「ええまあ。あと先輩、毎晩寝る前にシコツてるでしょ？で、結構その痕跡が残ってるんすよね……先っちょにティッシュがくつついてたりとか」

「……………」

ホースケ先輩は体育座りの姿勢ですんごく小さくなつてしまった。自分の両膝の間に“はあっ”とため息をつくと、「スマン」と小さく再度謝った。

「なんかさ、出すとすっげー眠くなっちゃうんだよね……それで昨日はそのまま寝落ちっちゃったみたいで、

本当にゴメンな……」ボソボソと弁解する。

「ハハ、わかります。アレ、何で眠くなるんでしょうね〜?」

俺はなるべく明るい声で、先輩を慰めるように同意してあげた。

「や、やっぱみんなそうなんだ。余韻に浸ってる内にいつの間にか眠っててさ……あーもうやばいよなー」

先輩は俺の態度にようやくほっとしたらしく、照れ笑いを浮かべながら頭を掻いた。俺も一緒にお愛想笑いを浮かべると、話題を変えるべく、丁度食べ頃に焼けた特上カルビに箸をつける。

「あ、この肉マジで美味いっすよ！ ほら先輩も食わないと焦げちゃいますって」

「お、おう」

どうにか元気を取り戻したホースケ先輩が肉を口に運び、「うん、美味しいな」と舌鼓を打った。肉を茶碗に取り、そのまま大量の白メシと一緒にがつり頬張る。その様子がまるで食べ盛りの高校生みたいだったので、微笑ましさにつつかり口を滑らせてしまった。

「でもさすがに今朝は驚きましたよー。尻にあんなもん突っ込んで、まさか先輩もゲイだったとは意外っす」

先輩が大仰にむせ返り、飯粒が飛んできた。

「お、オレはホモじゃねーよ!!」

先輩の大きな声に、向かいの席の客や通路にいた店員がこちらを振り返る。先輩は慌てて小声になると、「誤解だつて！ ケツに突っ込むからってゲイとは限らねーだろ」と早口でまくし立てた。そしてハッと何かに気付くと硬直して俺を見る。

「え……もしかしてお前……そうなの？」

俺はしくじったと後悔した。別に先輩とどうこう成りたかった訳では無い（職場恋愛とか面倒だし）のだが、普段の生活の中で初めて同類に出会えた事で浮かれているらしい。確かに先輩の言う通り、アナルで感じるⅡゲイって訳じゃない。こっちの世界に染まり過ぎていたせいで、ノンケのアナルプレイ愛好者もたくさんいるという事実をすっかり失念していたのだ。



“あーあ、やっちゃまったなあ”俺はちよつとげんなりしたが、でもそれほど深刻に落ち込んだ訳でもなかった。親や郷里の親友にはカムアウト済みだったし、自分こそまで秘密主義者では無い。好奇や偏見の目に晒されるのは嬉しくないが、そういう連中はこちらの方からお断りだし、その事で友人だと思っていた奴らが離れていくならそれはそれで仕方ないと割り切っていた。

ただ今回は職場の同僚という事で、出来ればゲイバレは避けたかったのだが……まあ先輩は周囲に言いふらすような人種とは違うだろう。それにこっちも彼の秘密を握っているからな、これでお互いイーブンってな訳で、大きな問題は無いと考えた。

「そうつすね……女の子もダメって訳じゃないんですけど、どっちかって言うとお前はそっち寄りですかね」

俺はちよつとぴり保険をかけてカムアウトした。セクシャリティがまだ固まっていなかった高校時代には女子とも付き合っていて、男女のセックスも経験済みだからまるつきり嘘という訳でもない。まあ今はもう男にしか興味が無くなっているのだが、一応バイセクシャルって

事にしておいた方が受け入れて貰いやすいんじゃないか、なんて……これってちょっとズルいかな。

先輩は俺の告白を聞くとびっくりした顔になり、その後「うーん」としばし考え込み、最後にハツとなって慌てたように弁解した。

「あ、いやつ、大丈夫！ ゴメン少し驚いただけで、うんっ！ ……秘密は守るし、オレはそんなに偏見とかも無いからっ!!」

「あーはい、これでお互いの秘密を握った事になりますね」

俺がそう笑ってみせると、先輩も引きつり笑いを浮かべながら「そ、そうだな。アナルプレイ好き同士って事で、ハハっ」とおどけてみせた。

いやいや、先輩はちよつと考え違いをしている。俺はゲイだけどバリタチであって、ケツは一切感じないんだが……まあ訂正するのも面倒だからこのままでいっか。

「あ、やばい。あと15分で昼休憩終わりっすよ！ 折角のいい肉なんだから残したら勿体ない」

俺が時計を見てそう言うと、先輩も「ホントだ、ほら沖田もどんどん食って！」とせかし、自らも肉乗せご飯をかき込んだ。気まずいという程でもなく、かと言って打ち解けた感じでもない微妙な空気の中で、向かい合って一緒に高級肉を食った。

まあノンケ相手にカミングアウトの直後としてはこんなもんだらう。これから互いの接し方がどうなるのかまだ未知数だったが、とりあえずこんな雰囲気の中でも肉は最高に美味かった。

第二章

翌朝。さすがの先輩も昨日の気まずさから自力で起きてくるのではないかと思っていたのだが、目覚まし時計の大合唱は普段と変わらず鳴り止む気配を見せなかった。俺はやれやれと先輩の部屋へ向かい、日課の殺戮任務をこなすとベッドの前に腕組みして立った。

ホースケ先輩は幸せそうな寝顔で眠りかけている。この人の鋼の睡眠力の前では、ホモフォビアも太刀打ち出来ないらしい。

何度か呼びかけてみたが、先輩からはまったく応答が無い。俺は仕方なくそっと布団をめくってみた。大丈夫、今朝はちゃんと服を着ている。胸までまくれ上がったTシャツから乳首が覗き、パンツは盛大にテントを張っていたけれど、この程度なら十分合格範囲だ。

ゴミ箱には丸められたティッシュが一番上に乗っていたので、昨夜も自家発電は欠かさなかったようだが、キチンとパンツを穿いている所を見ると一応反省はしたようだ。ついでにこの寝起きの悪さも改心してくれると良

かったんだが……。

「ホースケ先輩、起きて下さいよ！」

肩を揺すって起こそうと枕元に寄った拍子に、俺は足の小指を何かの角にぶつけて悶絶した。

「——痛ッてええ……!!」

思わず屈みこんで小指を握りしめる。爪の間に血が滲んでいた。涙目になりながら災難の元凶を確かめると、それはベッドの下に置かれた衣装ケースだった。引き出し式のプラスチックケースが閉まり切っておらず、その角が俺の可哀そうな小指を直撃したのだ。

「クソッ、ちゃんと閉めとけよもうっ！」

毒づきながら衣装ケースの引き出しをグイと押し込んだが、どうも中で何かが引っ掛かっているようで奥までしっかり入らない。仕方なくケースの中身を直そうと、引き出しを手前に引っ張り出してみた。

「あ……」

ヤバイ物が見えてしまった。衣装ケースの中は、手前にはタオルや衣類などそこにあるべき物が詰められてい

たが、その奥は秘密の道具類でぎっしりと埋まっていたのだ。毎夜その所有者を慰め、悦ばせる手助けとなる品々……オナホールやローションなど、割と一般的(?)な代物もあったが、半分以上はディルドやアナルビーズ、拡張用プラグなど尻がらみのオモチャたちが占めている。先輩は本当にアナルプレイ常習者らしい。見覚えのあるイボイボ付きのぶつとい電動ディルドもあった。昨日、先輩の尻に挟まっていた物に間違いない。

それらの一番上に鎮座し、引き出しの収納を妨げる原因となっていたのは電動マッサージ器……いわゆる電マというやつだった。それが本来の用途に使われるのでない事は明らかだ。何故ならそいつにはゴム製のオプシオン部品がくっついていたのである。振動ヘッド部分に直交する形で、貫通式のオナホールが装着された性具カスタム仕様の電マだった。

「ふうん、昨日はさすがにケツは弄らなかつたのか……」
パイプ状のホールの中を覗きこむと、面倒で洗わずに仕舞い込んだらしく、ベトベトした粘液状のものがまだ乾き切らずに残っている。

俺はふと昨日の事を思い出していた。ホースケ先輩は夢精の後、自力で目を覚ましたのだ。これは夢精の経験がある者ならわかると思うが、淫夢を見ている間はまったく起きないのに、放出した途端に不思議な程すつと目が覚めるものなのだ。(そしてパンツの中がザーメンまみれになっているのを発見する)

そうだ、今日も彼を射精させてやれば、さくつと目覚めてくれるのではなからうか。昨日の今日でやり過ぎな気もしたが、まだジンジンと痛む小指のせいで俺は少々ムカついていた。この仕返しをしてやっても、罰は当たらない気がする。

衣装ケースから電マを取り出すと、オナホの内側部分にローションを垂らして湿してやる。ふと、ベッド脇に置かれたサイドチェストが目に残った。上にはスマホやタブレットPCが置かれ、傍には充電用のUSBケーブル類がとぐろを巻いている。よし、これを使わない手は無いよな。

まずはいぎたなく眠りこける先輩の腕を、充電ケーブル

ルでパイプベッドの背もたれの棧に縛り付けた。万歳の形で拘束しても、ホースケ先輩は全く気付かずにされるがまだだ。次に先輩の両脚を跨ぐ形で俺が馬乗りになる。これでちよつとやそつとの事では身動き取れないはずだ。SMチックなプレイ？ に、少々興奮を隠し切れない自分がいた。

先輩のトランクスのゴムに手をかけ、グイと引き下ろすと、今日も元気な朝勃ち君が首を振っておはようの挨拶をしてくれる。うん、おはよう♪

昨日ちゃんと拭かないまま眠ってしまったのだろう、亀頭の辺りが乾いた精液でカピカピになっているし、時間の経ったザーメン臭がふうんと臭った。パンツの後ろ部分は尻に敷かれて脱がせなかったので、引き下げた前ゴムをキンタマの下にひっかけて固定する。持ち上げられた玉が竿の両隣で窮屈そうにしている。

準備が整うと、電マの貫通オナホを先輩のチンポにむにゅつと被せた。ローションが冷たかったのか、先輩の口から「んっ」という小さな呻きが漏れる。よし、それじゃあ本番始めるぞ。俺はにやけ笑いを噛み殺しながら

いざスイッチを入れた。"ブイイイイイ……" という音と共に電マが振動を開始する。

刺激を与え始めると、すぐにホースケ先輩の顔が切なそうに歪み、太ももを擦り合わせてモジモジし始めた。だが俺が体重をかけて両脚を固定しているせいでそれ以上は動かせない。電マを竿に沿ってゆっくりと上下させてみると、チンポがビクビクと激しく痙攣する。どうやら先輩は裏筋辺りを刺激されるのがお好みらしい。集中的にそこを責めてやると、ハンハンとエロ声をあげて咽び始めた。

ホースケ先輩の喘ぎ声が次第に大きくなり、快楽に耐え切れずに身悶える。電マのスイッチを最強に切り替えると、「つくうーん」と可愛い嘆き声で答えてくれた。拘束されている手足を動かそうともがくが、身動き取れずにクネクネと身体をよじって変なダンスみたいになっている。

よしよし、そんなにヨがってくれてこっちも嬉しいぜ。俺の中の支配欲がウズウズと昂ぶった。ホラ、あんまり時間もねえんだからもうイッチちまえよ!!

俺はチンポの根元を掴むとグイと皮を下へ引き、彼の一番のスポット——鈴口下の包皮の三角地帯へ電マを強く押し当てた。

“ビクウウツ!!”と大きくチンポが跳ね、一つ目からびゅぶつと精液がほとぼした。昨日の夜に抜いたばかりだというのに、それは俺の予想以上の飛距離で先輩の顔を見舞った。手をかざして防ごうとした時には既に遅く、次々と発射される白濁液が彼の胸元のTシャツを汚していく最中だった。そして次の瞬間、その爆撃の向こう側でホースケ先輩の目がぱつと見開かれた。

「なっ、何っ……んああああー!!」

ホースケ先輩にしてみたら、そりゃあ青天の霹靂だったに違いない。夢精の快楽に無理矢理覚醒させられてみれば、目の前にザーメンの雨が降っていて、その向こうでは後輩がのしかって自分のチンポを責めたてていたのだから無理もない。先輩は訳も分からないまま襲い来る快楽に耐え、精子の搾乳が終わるのをただ待つしかない存在だった。

だが本当の地獄はその先に待っていたのだ。ようやく射精衝動が収まったかと思ったとたん、先輩はエビ反りになってわめき散らした。

「無理ッ、無理ッ、それ止めるオオオオ——ッ」

射精直後の敏感になった亀頭を、尚も電マが刺激し続けていた。断末魔の悲鳴を上げながら暴れ狂う先輩の姿に、Sモードだった俺はさらに彼を苛めたくなくなってしまった。

「えー、何ですか？先輩、すげーキモチ良さそうでしたよ」俺はそううそぶいて、電マでグリグリと亀さんを撫でさすってやった。

「ダメッ、ダメだつて沖田っ……本当にもうっ……も、漏れるウツ!!」

先輩が歯を食いしばるのとほぼ同時に、チンポから黄金色の噴水が吹き上がった。男の潮吹き……と言えば聞こえはいいが、実際それは小便だ。就寝中、膀胱一杯に貯められた濃い尿がとめどなく放出される。



今度慌てる立場になったのは俺の方だった。急いで電マを取り外したものの、一度決壊してしまったダムは激しい奔流に為す術も無く、溢れだした洪水は先輩の腹に湖を作り、脇腹を滝となつてシーツに流れ落ちていった。「何か拭くものを……」とティッシュ箱を拾い上げた時にはもう、先輩のお漏らしはシーツを通り越してマットレスまでぐっしょりしみこんでしまった後だった。

先輩の拘束を解放すると、二人がかりでベッドにしみた尿の吸い取り作業となつた。

「何考えてんだよテメーはよっ!!」

「すいませんっ、まさかこんな事になるとは思わなくて……」

ホースケ先輩に怒られながら、ティッシュや雑巾をマットレスに押し付ける。部屋中に小便の臭いが充満していた。必死で作業する先輩が着ているTシャツも、彼の放った尿とザーメンでビチョビチョだ。

ふと窓際の目覚まし時計が目に入り、俺はぎよっとした。

「やばいつ、もうこんな時間!? せ、先輩オレ、今日は朝から外回りの打ち合わせがあつて……」

それは絶対に外せない大事なミーティングだった。大口のクライアント先での商談で、俺も上司のアシスタントとして同行しなければならぬのだ。

「はあ? ふざけんよっ」

先輩が俺を睨んだが、彼もその商談の重要性は十分理解していた。

「……くっそ、もういいから行けよ、あとはオレがやるからっ」

「す、すいませんっ」

俺は何度も頭を下げながら部屋を後にし、自室でスーツに着替えるとダッシュで会社へ向けて走り出した。



出先から直帰で寮に戻った時には、もう夜の九時を回っていた。重い足を引きずって自分の部屋の前に辿り着くと、向かいの先輩の部屋のドアが目に残る。

「先輩、ガチで怒つてたよな……謝りに行かないと……」

だが今朝の剣幕を思い返すとなかなかドアをノックする勇気が出ない。”後で謝ろう、先に風呂に入って気持ちを落ち着けてから……”俺は入浴時間の終了が迫っているのを言い訳に、謝罪を先送りにして共同風呂へ向かった。

脱衣所で服を脱ぎ、浴場の引き戸を開けた所で自分の判断を激しく後悔した。この時間、誰も居ないと思っていた風呂には先客がいた。よりにもよってホースケ先輩だった。このタイミングで、お互い裸で向き合わなきゃならないなんて最悪だろう。湯船の中の彼と目が合った途端、俺は硬直してその場に棒立ちになってしまった。先輩は全裸で立ち尽くす俺を上から下までじろりと眺めると、不愛想に言う。

「風邪ひくぞ。突っ立ってないで入って来いよ」

他に逃げ道もなく、俺はのそのそと浴室内へ歩を進め、かけ湯をして湯船に入るよりなかった。先輩から少し距離を取って、重い気持ちのまま湯に浸かる。

「打ち合わせは上手くいったのか？」先輩が前を向いた

まま聞いてきた。

「あ、はい。おかげ様で……あの、そっちはどうなったんですか？」

「出来るだけの事はしてみたけど、まだぐੱちより湿ったままだよ。ありゃあ、あと二・三日は乾かねえな」

俺は先輩の方へ向き直り、頭を下げた。

「本当にすみませんでした」

ホースケ先輩はフンと鼻を鳴らしてしばらく黙った後、「何であんなことしたんだよ」とぼそりと言った。

「そ、それはあの……先輩がなかなか起きなくて……でも昨日はイッた後すぐに自分で起きたじゃないですか。だから今日も同じ事をすれば起きてくれるんじゃないかと……」

しどろもどろになりつつ言い訳する俺を見つめていた

先輩は「はあ」と大きな溜息をつく。

「てっきりオレは逆レイプされるのかと思ったぜ」

「そつ、そんな事しませんよっ!! オレ、ノンケには手を出さない主義だし、ホモだからって誰彼構わずって訳じゃないです」

「……悪い、今のは失言。忘れてくれ」

先輩は素直に謝った。まあそもそもは、こっちががそう思われても仕方ない事をしたのがいけない訳で。

「もういいよ。元はと言えば朝起きれないオレが悪いんだしな」

先輩はそう言い終わると急にざばつと立ち上がり、空けていた距離を詰めて俺のすぐ隣に座り直した。

「あの……」

「いいから。アレじゃ警戒してるみたいで嫌だろ」

あー、こういう所だよなあ。ホースケ先輩が皆に慕われる所以だ。アナルフェチの変態な性癖はあっても、やっぱり先輩はいい人だ。そう思うと同時に、俺はさっきの自分の発言に後ろめたさを覚えた。無駄な事は嫌いだっだから、ノンケに手を出さない主義なのは本当だ。でもそれは頭で考えての話であって、本能的な反応を抑える事までは出来ない。

先輩はゲイ受けるタイプでは無かったけれど、ご近所のフツー青年って感じは嫌いじゃなかった。身体もきれいだっし、正直布団をめぐってムラッしたことは何

度もある。もし彼がこっち側の人間で、職場とも無関係だったならば、ひよつとしてひよつとした未来もあり得たかも知れないな……なんて。

やばい。何故だかドキドキが止まらない。昨日今日と、もつとすごい事をやらかして今更なのに、並んで風呂に入っているだけの今の方がずっと興奮してしまう。ムクムクと下半身が反応して、あつという間に八分勃ちくらいになってしまった。入浴剤のお陰で濁り湯じゃなかったら、本当にやばかった。俺は自分を恥じた。向こうはこっちを信頼してくれての行動なのに、こんなの絶対ダメだろう。

俺が必死に邪心と戦っていると、先輩がまた「はあつ」と大きな溜息をついた。

「あーあ、今夜どうやって寝るかなあ」

そうだった、先輩をションベンまみれのベッドに寝させる訳にはいかない。

「あのつ、良かったら部屋交換しませんか？先輩はオレのベッド使って下さい」



今夜どうやって
寝るかなあ

あーあ、

「ああん？ それじゃお前は どうするんだよ」

「えっと、オレは先輩の部屋の床で寝ますんで……」

ホースケ先輩はちよつと考えたが、すぐに頭を振って
その提案を拒否した。

「どうしてです？」

「……だって今、オレの部屋すっげー臭うんだよ。恥ず
いから絶対ダメ！」

そう言っつてふくれっ面で拗ねてみせる。その様子を
ちよつとカワイイと思つてしまった。いやいや、でもそ
れじゃ困るのだ。確かにお漏らしのニオイを先輩に嗅
がれるのは嫌だろうけど、他に良い方法が思いつかな
い。さすがに一緒の部屋で寝るといふ提案はナシだよな
……。

「しゃーねえ、お前の部屋で一緒に寝るか」

先輩は俺の心を見透かしたかのようにそう言った。

「で、でも……」俺が口籠ると、ホースケ先輩は剣呑な
目でこつちを見る。

「問題ねえよ。今朝のお返しに、今夜はお前を縛りつけ

て寝るからな」

「ええっ!?!」

あまりの衝撃的提案に、ポカンと大口を開けたまま固まってしまう。そんな俺をよそに、先輩は「先に出るぞ」と言いつて湯船を上がると、すたすたと脱衣所へ向けて歩いて行ってしまった。そして引き戸の前で振り返ると、ニヤツと笑ってこう言ったのだ。

「バーカ、なに本気にしてんだよ。あ、お前の部屋、勝手に上がらせて貰うからな。家探しされたくなかったらとつとと身体洗って出てこいよ」

きれいなプリケツが脱衣所へと消えるやいなや、俺は大急ぎで洗い場で身体を洗い、石鹸を流すと先輩の後を追って部屋へ急いだ。

第三章

風呂から戻ると、ホースケ先輩は俺の部屋のベッドの上で、ビール片手に自分のスマホを弄っていた。タンクトップにトランクスという格好で、まるで自分の部屋に居るかのように寛いでいる。普通通りにしているという彼なりの心遣いなのもかもしれないが、エロい鎖骨や肩のラインが丸見えでちよつと困る。

部屋の中を見回してみたが、勝手に冷蔵庫のビールを飲まれていた以外は特に物色された形跡は無い。俺もビールを取り出してプルタブを開けると、ベッドの縁に腰かけた。

「家探しして何かいい物ありました？」見られてやましい物はないはずだったが、一応確認する。

「あ？ どつかエログッズとか隠してんの？」

「いや、ローションくらいしか無いですけど……オナホは先月捨てちゃったし」

先輩はちえつと舌打ちすると「どうせヤリまくりでオナニーなんかしねえってんだろ。そーいやお前、付き合っ

てる相手とか居るのかよ？」と聞いてきた。

「いや、学生時代は居ましたけど、東京こっちに来てからはまだ……先輩こそカノジョさん居ないんですか？」

俺がそう聞き返すと、先輩はいやーな顔でこちらを睨み、不貞腐れたように言った。

「嫌味かよ、こんな性癖持つてて彼女なんか出来る訳ないだろ」

あー、やっぱり彼女にもそっち方面求めちゃうんだ。そりゃあ彼氏の尻穴をほじりたい女子というのは少数派に違いない。あれっ、それじゃあもしかして……俺はなんだか意地悪をしたくなって禁断の質問を投げてみた。

「先輩、もしかしてまだ……」

「うっせー！ 違げえわ……風俗くらい行った事あるし!!」

真っ赤になりながら否定する。あーはいはい、素人童貞って奴ですね。

先輩はそのままばつが悪そうにしばらく黙っていたが、やがて独り言のように「やっぱり挿入無しだと童貞かなあ」とぼやいた。どういふ事かわからずきよんとし

ていると、先輩は伏し目がちに俺を見て続ける。

「オレが行ってるのって、そっち系の風俗だからさ、本番は無いんだよ」

「そっち系って？」

「だ、だからっ……アナルプレイ専門店……」

最後は消え入りそうな声だった。へえ、よく知らないけど、ノンケ向けにはそういうニッチな風俗まであるのか。俺は何だか楽しくなってきた。これはあれだ、修学旅行や部活の合宿での猥談みたいな雰囲気だ。「それって、具体的にどういうサービスしてくれるんです？」

「はあ？ なんでお前に教えなきゃなんねーんだよ！」

「いいじゃないっすかー。お互いこういう話できる相手なかなか居ないんだし、この際全部ぶっちゃけましょうよ」

そうだ、学生時代はゲイバレを気にして、仲間内の楽しいエロ談義にもあまり加われなかった。おそらく先輩も似たような境遇だったのではないだろうか。昔やりたくて出来なかった事を、この場で叶えてみたかった。

楽しみに浮かれる俺を前に、先輩はためらいつつも性癖の告白を始める。

「沖田もゲイだったらわかるだろ、前立腺つてやつ……そこを指とか道具とか使って責めて貰うんだよ。こ、こんな感じでさ……」

そう言つてスマホを操作すると、こちらに差し出して寄越した。それは彼の行きつけらしい風俗店のウェブサイトだった。

店の名前が『M男の飼育部屋』というド直球でちよつと退いたが、先輩が可哀そうなのでそこは触れずに置いてやった。サイト内をアレコレ覗いてみると、どうやら女王様がM男君たちにお仕置きをしてくれるSM風俗の店らしい。色々なコースが用意されていたが、その中にアナルプレイコースというものもある。多分、先輩のお目当てはこれなのだろう。

「ふうん、このFFオプションって何っすか？」

俺はアナルコースの中にあつた特別メニューらしきものを指して聞いてみた。

「そ、それは……」

「あつ、もしかしてフィストファックの略か！先輩、コレ頼んだ事あります？」

「ねえよっ!! さすがにそれは無理だつて」

「なーんだ。先輩、アナルに腕まで入るのかと思ひましたよ。あ、じゃあこつちのPBFオプションつてやつは？」

それを耳にした途端、先輩は真っ赤になつてスマホを奪い取つていった。

「も、もういいだろっ!!」そう言つて画面をシートに伏せて隠してしまう。

ほほう、こつちは体験したことあるんだ？俺は自分のスマホを取り出すと、検索欄に『M男の飼育部屋』と打ち込んだ。

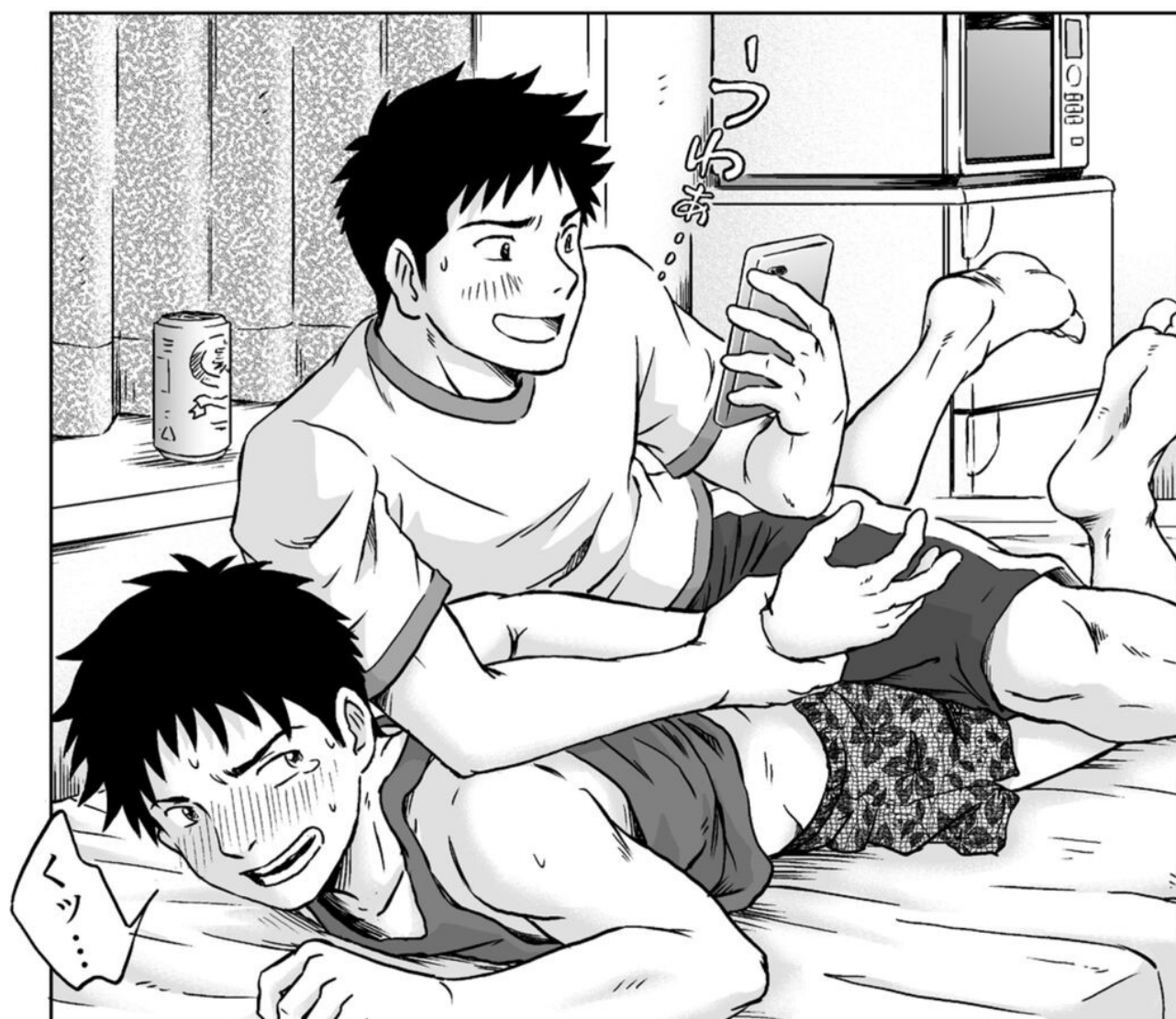
「おい、よせよっ」それを見た先輩が阻止しようと飛びかかつて来る。だが残念ながらガタイの差で彼は俺の敵ではない。逆に組み敷いてしまうと、先輩の背にまたがつてPBFオプションとやらの詳細をタップした。

「うわあ……」思わず声に出してしまった。

PBFとは、なんとペニバン・ファックの略だったからだ。ペニバン、つまり作り物のペニス付き股間バンドを装着した女王様がM男君の尻を犯してくれるというオプシオンだ。サイトには、ボンデーシルツクの女王様が、おっさんの尻に容赦なく突っ込んでいるイメージ写真が掲載されていた。そっか、先輩はこれやったんだ……作り物相手とはいえ、もうアナルセックスまで経験しちゃったんだなあ。

そんな感慨を帯びた目で組み敷いた先輩を見下ろすと、彼は潤んだ瞳で羞恥に耐えていた。こちらの視線に気付くと慌ててそれを隠すようにシーツに顔を埋めてしまう。

俺はやり過ぎたと気付いて慌てて彼を解放した。なるべく明るく茶化す感じで、「あれえ、泣く事ないじゃないっすかあ」とおどけてみせる。



「誰も泣いてねえよっ!!」

起き上がりざまに負け惜しみを吐きながら、先輩の恨みのキックが俺を襲った。運悪く金的に入った一撃のお陰で、俺は「うぐっ……」と呻きながらうずくまる羽目となる。

「バカ、てめーが調子に乗るからだろ」

脂汗をかきながら悶絶し続ける様子に、さすがに悪かったと思ったのか、痛みを和らげようと腰を叩いてくれる。ああ、自業自得とはいえこの痛みはキツイ。でもそれと引き換えに、先輩との間の変な空気が消え去ってくれたのは不幸中の幸いではあった。

「はあ……でもSM系の風俗って結構いい値段するんすね。本番どころかフェラもNGでこの金額って……」

どうにか痛みが引き始めた頃になって、俺は涙目を拭いながらそう苦笑いした。

「マイナーな嗜好だからな、仕方ねえよ」開き直った先輩が口を尖らせて言う。

そっか、ノンケの世界でもマイノリティは苦勞するん

だな。俺は難儀な宿命を背負った先輩に同情し、かつその世界で健気に生きている彼がかわいく思えてしまった。その気持ちにまた余計なひと言を言わせてしまったのだ。

「先輩がこっち側の人間だったら、ケツなんてタダで掘ってあげるのになあ」

先輩の眉間に皺が寄り、「えっ」いう顔でこちらを向く。あ、やべ。そういや先輩は俺をウケだと勘違いしているんだっただけ。

「掘るってお前……」

先輩が怪訝な瞳で問いたです。やれやれ、せめて今夜は誤解したまま置いて欲しかったんだけどな。

「えーと、先輩はなんか誤解してるみたいですけど、実はオレ、タチ専門なんですよ。あ、タチってわからないか……要するにケツ掘るのが好きな側なんですけどね」

先輩の表情が困り切った顔になる。ああ、やっぱそうなっちゃうよね。怖がらせるつもりは無かったんだけど。

「あの、無理矢理襲ったりはしないんで……」

「あつたりまえだ、バカ！」

先輩は俺の頭をバシツとはたくと、うーっと唸ってベッドに突っ伏してしまった。

「やっぱりオレ、向こうの部屋で寝ましようか？」

恐る恐る切り出した。先輩はがばつと起き上がると、

「んな事出来る訳ねえだろ」と俺を睨む。

「大丈夫だよ。か弱い女じゃねえんだから、襲ってきたら返り討ちにしてやるし」

言い終わるとまたベッドにくたくたと崩れ落ちる。

「もうお前、色々驚かせ過ぎ……こっちの気持ち追いつかねえじゃんよ」

「すみません……」

先輩はシーツに半分顔を埋めたまま片目だけでこちらを見上げると、「もうこれ以上衝撃の告白は聞きたくねえからな、とつとと寝ちまおうぜ」と言った。



「電気消しますよ」

「ああ」

二人で同じ布団に潜り込む。一応、「自分が床に寝る」という提案はした。でも先輩は「平気だから」と一緒にベッドに入るよう主張してきかなかった。

シングルベッドに大の大人二人はさすがに狭い。先輩はタンクトップにトランクス、俺の方はTシャツとハーパンという格好だったが、遠慮して目一杯端っこに寄ってみても、互いの肩や腕が触れてしまう。かといって背中合わせになるというのもダメな気がするし……。

布団の中をじんわりと伝わってくる自分以外の体温と湿気。すぐ近くで聞こえてくる規則正しい呼吸。隣の気配が気になって、全然眠れる気がしない。

そういえば誰かと同衾どうきんするのは久しぶりだ。そしてそういう経験は大抵情事の後だったから、どうしたってエロい気分が運ばれてきてしまうのだった。

俺は勃起していた。やばい、こんなのバレたら言い訳のしようが無い。わざと呼吸を遅くし、狸寝入りを決め込む事にした。これなら万が一勃っているのを見つかった場合も、レム睡眠中の生理現象って事で言い逃れ出来ると考えたからだ。

それから悶々とした気分のまま、30分は経った頃だろうか。相変わらず寝付けないでいた俺の耳元に、先輩のかすかに囁くような声が投げかけられた。

「……沖田、もう寝ちまった？」

どうやら先輩も眠れないらしい。だがガチガチ状態を保ったままの俺は、ここで返事をする訳にはいかなかった。わざと大きめに寝息を立て、ぐっすり寝入っていることをアピールする。

やがてがさがそという音と共に掛け布団が引つ張られ、先輩が上半身を起こしたらしい事が察せられた。何だろう？ 薄目を開けて様子を確かめたかったが、やはりそれは危険と判断して我慢した。壁の掛け時計のチクタクいう音が、やけに大きく聞こえる気がする。

ふと、ゆっくりと、本当に少しずつそろそろと、掛布団がめくられていつている事に気がついた。先輩がやっているに違いない。初めはトイレにでも行くつもりなのかとも考えたが、それにしても遠慮し過ぎな動作だったし、いつまで経っても先輩がベッドから抜け出る気配は無かった。掛布団は俺の膝あたりまでめくられて、そこ

でずっと止まったままだ。

だんだん心臓の鼓動が速くなる。今、先輩の視界にはハーパンを押し上げている俺の勃起があるはずだ。いや、これは睡眠中の自然現象なんだから問題ないはず！ そう自分に言い聞かせてみたが、それでも先輩に見られているかと思うとドキドキする。

ふいに触れられ、危うく飛び上がる所だった。

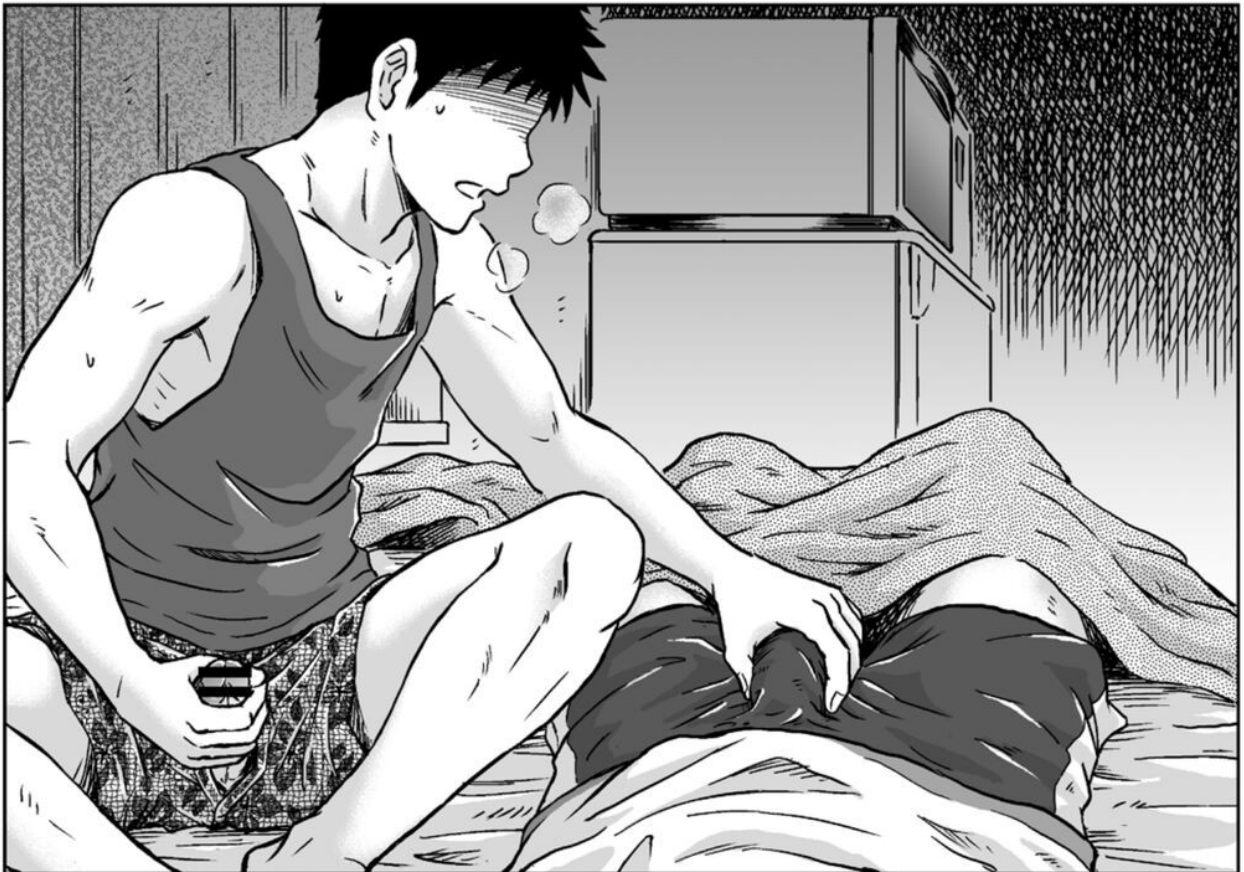
それは本当に軽く、触れるか触れないかギリギリの刺激ではあったが、確かに先輩が俺の根元付近を指で挟んで触れたのだ。な、な、どういうつもりだ!?

動揺をかうじて押さえ込み、どうにか寝たふりを続けていると、俺が起きる気配が無いのに安心したのか、さつきよりも少し強い力ではつきりと触れてくる。先輩の指は勃起の輪郭を辿って根元から上へと這ってゆき、カリの部分に達するとその張り出しを確かめるように何度も往復した。そして亀頭の丸みをゆっくりと撫ぜると、今度は裏筋を滑って根元へ戻って行く。

とうとう我慢が出来なくなり、ちらっとだけ薄目を開けて辺りを見た。薄闇に浮かぶシルエット姿の先輩が俺の股間を凝視し、左手で触れて確かめている。そしてあるう事か彼の右手はというと、トランクスから引っぱり出した自らを握りしめ、ゆるゆると揉み込むように刺激していたのだ。ホースケ先輩は俺をオカズに自慰に耽っていた。

見てはいけないものを見てしまったと思い、慌てて目を閉じる。まるで訳が分からない。俺が先輩に手を出すのならともかく、ノンケの先輩の方から夜這いを掛けてくるなんて考えてもみなかったからだ。

どうしていいのかわからず、ただされるがままにしているしかなかった。先輩は包み込むように俺の上に掌を乗せ、時折じんわりと力を加えてくる。よくよく耳を澄ますと、先輩の押し殺した口呼吸がかすかに聞こえ、それは徐々に熱を帯びていくように思われた。先輩はどこまでするつもりなのだろう……まさかこのまま達してしまっなんて事、無いよな？



だが俺の心配とは裏腹に、それは突然に終了した。先輩は俺からゆつくりと手をのけると、始めた時と逆の手順でそつと布団を戻してベッドに入った。こちらに背を向け、壁を向いて横になる。彼の後姿を横目で見ながら、俺は胸の底がジリジリしてたまらなくなっていた。畜生、何なんだ何なんだ何なんだ!!

攻撃衝動のようなものが込み上げ、頭の中で何かがブチッと切れた。

何故そんな事してしまったのか、自分で自分の行動が信じられなかった。気付いた時には先輩を背中からきつく抱きしめ、彼の尻に股間を押し付けていた。

「お、沖田ッ、何を……っ!？」

「何をじゃねえよ、そっちが手を出してきたんじゃねーか!!」

さらにきつくチンポを押し付ける。興奮でビクビクと脈打っているのが、先輩の尻にも伝わっているはずだ。俺は先輩の前に手を回してギュッと握り込む。彼の身体がビクンと跳ねた。そこはまだ熱く漲ったままだった。

「先輩、オレに掘られるのを想像してオナつてたんでしょ？ ペニバンなんかより、本物が試してみたいんじゃないんですか、どうなんです？」

先輩は肩を震わせたまま黙り込んでしまった。俺も心臓が爆発しそうだ。興奮と抱きしめた二人分の体温で汗が噴き出していたが、身体の芯は緊張で冷たく冷え切っているような変な感覚。俺は覚悟を決めて言った。

「ねえ先輩、一度だけ抱かせてくださいよ」

第四章

先輩はYESともNOとも言わなかった。ただ黙って震えているだけだ。しかし彼の欲望の方は固く保ち続けている。上半身が意思表示しないのならば、下半身のサインを俺は取る。

太ももの隙間からトランクスに侵入し、彼の部分を引っ張り出して剥き身にした。竿を握り込み、ゆっくりと上下に扱いてやると、過呼吸のような不規則な鳴咽が漏れる。先端に指先を這わせ、亀頭部分をくちゆくちゅと撫で回す。そこは俺が触れる前から既に先走りである。ぬるだった。

「んくっ……」

亀頭を責められて先輩は歯を食いしばった。膝を曲げて縮こまろうとするのを、脚を絡めて阻止する。背を向けていた体をこちらに向き直らせると、熱く潤んだ瞳とかが合った。そっか、これがホースケ先輩のセックスの時の表情なんだ。情欲に流される己を恥じ入りつつ、不安と期待、憔悴と昂揚が入り混じって泣き出しそうな子

供みたいな顔……熱病患者のような吐息が絶え間なく俺の顔にかかる。

恥ずかしさに居た堪れなくなったのか、顔を背けようとするのを口づけて引き戻した。口内に侵入して舌を絡め取る。同時に亀頭をしっかりと握って掌で刺激した。

「ふう……ンッ、んんッ!!」

上の口を舌で犯しながら、彼の一番敏感な部分をなぶってやる。先輩は苦痛と快楽の狭間で身悶えたが、きつく困ってその場に固定した。股の間に膝を割り入れ、会陰部をグイと押し上げると一気に太さを増したのがわかった。へえ、こういうの感じちゃうんだ？

男同士は初めてだろうから、優しく甘々なムードがいいかとも思ったのだが、どうやら先輩は半ば強引にされる方がアガる感じだ。まあそれならそれでこっちも合わせてやろう。俺はそのまま体勢で彼を地獄の快樂ツアーに招待する事にした。

「ン——ッ、ンン——ッ!!」

塞いだ口から悲鳴に似た嬌声が溢れ出した。亀頭のみ



に与えられる痺れるような刺激に半狂乱となつて逃がれようとするが、決してそれを許さない。痙攣発作のように身体を突っ張らせ、嫌々をするように首を振って苦痛を訴えたが、そんなものを聞き入れてやるつもりは毛頭無かった。

ついに耐えられなくなったのか、とうとう先輩は自ら腰を振って催促するまでに至つた。要するに、先端だけでなく竿全体を抜いてくれというおねだりだ。敏感過ぎる彼はまだ、亀頭責めだけではいけないらしい。先輩にとってこのおねだりは恥辱の最たるものに違いなかったが、それを選ぶより無いほど限界まで追いつめられていたのだ。

俺はしばし悩んだ挙句、初体験に免じて手の動きを竿にまで拡げてやる事にした。ようやく純粋な快感を得た先輩から、さっきまでとはまるで違うヨがり声が発

せられる。感じ易い彼の肉体は、あつという間に快楽の虜になってしまったようだ。

蕩けて瞳孔の開き切った瞳は恍惚の色を浮かべ、陶然と性に耽る姿に日頃の好青年の面影は無い。一度痴態を晒した事で開き直ったのか、それとも快楽に流されやすい生来の性質なのかわからないが、こっちが退き気味になるくらいの変貌ぶりだ。

より刺激を高めようと手の動きに合わせて淫乱に腰を振り、進んで口を吸って舌を絡ませると、注がれた唾液を従順に飲み干す。タンクトップからはだけた乳首をキュツとつまみ上げると、「クウン」と子犬のような声で呻いた。

やがてホースケ先輩の腰がアーチのように浮き上がり、膝がガクガクと震え始めた。どうやらその時が近いらしい。俺は扱き上げる速度を増し、鈴口下のスポットを重点的に責めてやる。突如先輩がのけ反ったかと思うと、口を離して「イ、イクウツツ!!」と叫んだ。

その言葉を聞くや、すかさず先輩から手を離した。そ

して上昇して射精体勢に入っていた睾丸をむんずと掴むと、力いっぱい下方へ引き下ろす。

「んぎイツ!!」先輩が悲鳴を上げた。

彼の可哀そうな性器はビクビクと首を振って射精を引き起こそうと試みたが、残念ながらその銃口から何かが発射されることは無く、全ては空撃ちに終わった。ようやくその律動が収まってから、初弾になるはずだった精液の一部が滲み出して、でろりと彼の腹の上に落ちた。

「あ……ああ……あ……」

快楽を伴わない不完全燃焼な絶頂に、ホースケ先輩が悶絶していた。俺は彼を囲っていた檻を解き、膝立ちになってその醜態を眺めた。涙を浮かべ、訳が分からないといった顔で先輩が見上げる。その表情には隠しきれない恨めしさが滲んでいた。

「なに独りで勝手に盛り上がってイこうとしてるんすか？ 風俗の客じゃあるまいし、自分だけキモチ良くなるうなんて虫が良過ぎるっしょ!!」

そう冷たく言い放つと、先輩がクツと唇を噛んだ。

俺は先輩のトランクスとタンクトップを剥ぎ取って全裸に剥くと、自らも着ていたものを全部脱いで裸になった。先輩の視線が一点に注がれ、目を見開いて硬直する。その場所は既に天を衝き、欲望を滾らせて威容を誇示していた。先輩の胸に跨ってそいつを彼の鼻先にかざす。「舐めろよ」

精一杯ドスの効いた声でそう命じた。先輩はチンポの向こうから怯えた目でこちらを見上げ、おずおずと震える手でそれに触れた。だがやはり男のモノを口に含むのは抵抗があるようで、なかなかそこから先に進めない。可哀そうだが、少し強引な手に出ることにした。

先輩の鼻をつまみ、閉じた唇に亀頭を押し付ける。彼は顔をしかめて歯を結び、俺の侵入を拒んだが、構わず唇を割ると、歯列に先走り汁をなすり付けてやった。

「ん……む……」

先輩の目尻から涙がつうと一筋流れる。

断っておくが、本気で嫌ならば俺を振り払って逃げる事だって出来るのだ。そうしないのは、本人の真の欲望が自らをこの場に縛り付けているからに他ならない。俺

はただ、こいつが一步前に進むための手助けをしているだけだ。

「ほら、もう観念して口開けろって」

先輩の口が少しずつ開いてゆく。必要最小限の隙間が空いた所で、彼の口内にずぶりと自身を差し入れた。

一旦受け入れてしまうと、先輩はそれまでの抵抗を一切止め、その口を好きに使わせた。初めて味わう男のサイズに時折えづきそうになりながら、それでも口いっぱい、のチンポを必死に頬張っている。

「歯を立てるなよ……舌も使って扱いてな」

俺がそう言うと、戸惑いながらも素直に指示に従い、たどたどしく舌を這わせてくる。

「そうそう、初めてにしては上手いじゃん。ずっと本物が欲しかったんだろ、後でケツに挿れてやるからしっかりとしゃぶれよ」

正直、初心者がそんなに上手いはずは無かったのだが、それでも初めてのフェラチオに奮闘するご褒美として、下の彼にも触れてやろうと後ろ手に腕を延ばした。そこで俺は背中越しに探り当てたモノの堅さに驚いた。萎え



ているとばかり思っていた先輩のチンポは、ギチギチに勃起した状態だったのだ。口に男を咥えながら、彼自身の男が興奮にいきり立っていた。

——俺はなんとなくわかってしまった。いくらなんでも普通のノンケが初フェラで勃起するのは不自然だ。ホースケ先輩を昂ぶらせているもの、それはきつと内に秘められた被虐趣味マゾヒズムに起因するに違いない。薄々そんな気はしていた。今、彼を滾らせているのは、同性の性器を咥えさせられているという屈辱感なのだ。前立腺プレイに快感を覚えるというのも嘘では無いのだろうが、おそらく精神面においてもアブノーマルなプレイで辱められる事に喜びを覚えるタイプ……つまり彼は、“M男君”そのものなのだ。

そう考えれば全てが腑に落ちる。それが証拠に、彼が本番禁止のSM風俗だけに通い詰める理由が他に思いつかない。もしM男で無いというならば、たまには普通の風俗へ行き、とつくに童貞を捨てておかしくないのだから……。

「んだよ、チンポ咥えさせられて興奮してるのかよ、あんたマジもんの変態じゃね？」

俺はわざとらしく先輩を煽り、彼のチンポを後ろ手で扱いてやりながら、喉奥に自身を突き立てた。ディープスロットに喉を詰まらせ、涎と鼻水まみれで苦しみなながらも、やはり彼のMの本性は俺の手の中で歓喜に震え続けていた。

本心を言えば、この真実は俺をちよつと残念な気持ちにさせたのだった。SMチックなプレイや、半ば強引に攻めるのも嫌いではなかったが、先輩にとって今の俺は、自身を辱めてくれるレイプ魔ホモの竿役に過ぎないのだろうと知ってしまったからだ。

そう思うとやはり若干の悲しみを禁じ得ない。どうやら俺はここ数日の出来事で、ホースケ先輩に淡いときめきのようなものを抱いてしまっていたらしい。

ブルーに落ちかけた気持ち奮い立たせ、気持ちを切り替える事にする。先輩がノンケなのは最初からわかっていたのだし、端から何も期待していなかったのだから

これでいいのだ。竿役なら竿役として、こちらも遠慮なく楽しませて貰うだけの話だ。据え膳食わぬはホモの恥って言うもんな。



喉からずるとイチモツを引き抜き、ベッドと壁の隙間に隠してあったローションを拾い上げると、先輩は目ざとくそれを捕えて顔を引きつらせた。

「お、沖田……あの……」

「待つてな、ケツに挿れてやるから」

彼の両脚を抱えて大きく股を開かせる。これから犯される場所が丸見えになった。いきなりM字開脚させられた先輩は泡を食ってじたばたしていたが、「自分で抱えてろ」と強い口調で命じると、顔を真っ赤にしながらも大人しくそれに従った。俺はローションを手を絞り出して先輩の尻穴にたっぷり塗りたくり、残りを自分になすり付けて標的にびたりと押し当てた。

「ま、待つて……本当に……するのるか？」

先輩が震える声で制止した。本気で怯えているように見えるが、ドMをもってしてもやはり初挿入は怖いのだろうか。でもここまで来て泣き言なんか聞きたくない。「ああ？ 今さら何言ってるんだ、本物で犯されたかったんだろ!？」

「で、でもオレ、まだ気持ちの準備が……」

「別に男にケツ掘られたからってホモになる訳じゃねえよ」言い終わる前に一気に亀頭をめり込ませた。

「くうあッ!!」

小さく叫ぶと同時に先輩の身体が強張る。アナルプレイ常習者とはいえ、慣らし無しだとさすがにきつい。括約筋がキュツと窄まり、侵入者を圧迫してそれ以上の侵攻を拒もうとする。だが既に差し込まれてしまった後では手遅れだ。俺は先輩の両足首を掴んで頭の上まで押しやり、いざつて腰を前に進めると、無遠慮に根元までずぶずぶと振じ込んだ。

「い、痛い沖田ッ」

「うるせえ、初めて男に犯された気分はどうなんだ!？」



オレ、
まだ気持ちの
準備が……

ああ？

男にケツ掘られ
たからって

ホモになる
訳じゃねーよ!!

グッ
グッ
グッ

俺の胸を押しして抵抗する先輩を無視して、まだ十分拡がり切っていない直腸を強引に蹂躪した。最初から大きく腰を振り、抜けそうになるギリギリまで引いては最奥まで一息に突く。先輩は歯を食いしばって固く瞼を閉じ、荒っぽいストロークに耐えていた。閉じた瞼からポロポロと涙が零れる。

「目を開けてこっち見ろよ！ 本当はケツにチンポぶち込まれて嬉しいんだろ、え!？」

腰の角度を変え、奴のスポットめがけて当て掘りしてやった。「ふうんッ!!」と嘯み殺した喘ぎ声が洩れる。既に開発済みの前立腺を突き上げると、萎えかけていた先輩がみるみる力を取り戻してゆく。ちえっ、しつかり感じてんじゃねーか。どうだ、本物の味はよ!? 作り物のペニバンなんかとは比べ物にならないだろうが!!

「ああっ、あーっ、あああーッッ!!」

先輩はとうとう堪え切れなくなり、部屋の外まで聞こえそうな声で叫び始めた。股間の屹立は昂ぶりに震え、歓喜の涙をたらたらと垂れ流している。俺は彼の脚を肩

に担ぐと、憎んでいるかのように渾身の力を込めて打ち込み、パンパンと尻を打つ音が辺りに響き渡った。

俺はイライラしていた。腹の中がむしゃくしゃして、その鬱憤を全部先輩の内部へとぶち込んだ。なのにコイツはそれを悦び、被虐の愉悅を享受し続けている。それがどうしても許せなかった。

いつもなら、ウケを泣いてヨがらせるのは俺にとってもセックスの愉しみの一つだ。なのに今はまるで愉しくない。自分が奴の妄想ではモブのレイプ野郎でしか無いのだろうという思いが、どうしても拭えなかったのだ。

“畜生ッ、本物の責苦つてやつを教えてやる!!”

奥歯をギリッと嘯みしめると、奴の背中に腕を回してグイと引き起こした。尻を串刺しに貫いたまま、くの字に折り曲げた身体を抱えて立ち上がる。駅弁で掲げられた先輩は落下の恐怖に怯えてしがみついた。

「お、沖田ッ!」慌てふためく奴を抱いたまま、部屋を出て廊下へと歩き出す。

「お、おいつ、やめっ、何を考えて……ッ」

「あんまり騒ぐと誰か起きてきちまうぞ」

低い声でそう囁くと、先輩はハッと口をつぐんで青ざめた。

非常灯に照らされた寮の廊下を、弁当を揺すり上げながらゆつくりと歩く。廊下の両側に個室のドアが並び、中では見知った同僚達が眠りについてはいるはずだ。しがみつくと先輩の肩が震えている。

長い廊下のほぼ中央、一階へ降りる階段が接する場所に着くと、そこへしゃがんで荷物を降ろす。仰向けに床に横たえられた先輩が天井にある物を発見して目を見開いた。

「か、監視カメラ……ッ!!」

「知ってるよ、だからわざわざここに連れて来たんだろ」
俺は奴の肩を掴んで床に押し付けると、ガツンと一発尻に打ち込んだ。「あうっ!」不意の一撃に思わず声が漏れ、先輩が慌てて口を押えて辺りを見回す。

「あんたが大人しくやられてくれてりゃ大丈夫だよ。何かトラブルでも無い限り、誰も録画映像なんかチェック

しないだろうからな。でも後で、夜中に誰かが廊下で騒いでた。なんて苦情が入ったら、一体どうなると思う?」

俺の指摘に、先輩の目が本物の恐怖の色を浮かべた。

「せいぜいエロ声を我慢するの、頑張ってくれよ」そう言い残すと、廊下の真ん中で猛然と奴を犯し始める。

先輩は鼻と口を両手で押さえ、必死に声を押し殺していた。奴の片脚を肩に担ぎ、開いた骨盤に向けて容赦ないガン掘りの連続攻撃を加える。空いた右手で亀頭を扱いて責め立ててやると、いったんは恐怖に縮こまり萎えていたそこは、すぐに反応して復活を成し遂げた。こんな状況でも勃つなんて、憎らしいほど淫乱な身体だ。だが亀頭責めでは達せないのは先刻承知、アナルファックと亀頭責めのW攻撃にいつまで耐えられるか見ものだった。

初めの内こそ、先輩はジタバタとのた打ち回りながら押し寄せる快楽に抗っていたが、じきにその身動きすらも叶わなくなり、ただじっと内に籠って耐えるだけ



になってしまった。白目を剥いたグロツキーな顔で、時折思い出したかのようにピクピクと反応を示すだけだ。くそつ、これじゃつまらねえだろうが！

バシイツ!!

奴の尻を思いっきり平手打ちする。その刺激で死体だった身体ボデイが息を吹き返してギャツと跳ねた。さらにもう一撃。尻たぶに真つ赤な手形が浮き上がる。意識を無理矢理覚醒させられた先輩は、再度地獄の快楽に放り出され、慌てて口を押えて悲鳴を飲みこんだ。

体位を後背位に変え、前立腺を押し潰すように上からガブって叩き込む。奴の意識が彼岸に行けぬよう定期的に尻を叩き、回した腕で乳首をひねり上げた。

突然、奴は背中を大きく反らして痙攣を引き起こした。押さえていた口から、

「うあう……う……」と断末魔の音が洩れ、手足が不随意運動をして不気味にのたうつ。体重を支えられなくなった膝がカクンと折れた。その拍子にずるずるになつた尻穴からチンポが吐き出されると、奴はだらしなく床に崩れ落ちてしまった。それでも痙攣は収まらず、随分と長い時間、死にかけの蛙みたいな動きを続けていた。

「何だよ気色悪い……オラ、へばつてんじゃねえよ!!」

だがもう奴には俺の言葉なぞ聞こえていないようだ。荒い呼吸を繰り返すだけで、床に倒れ込んだまま動こうとしない。

「おい起きろ! まだ終わりじゃねえんだからな!!」

そう言って死体を裏返すと、すぐ下のカーペットに白い粘液がべつとりと張り付いているのが見えた。

——嘘だろ!? 今ので射精しやがったのか……自分一人ケツだけでいきやがってふざけん!! まだまだ苛め抜いてやるつもりだった俺は、奴の顔面に怒りの唾を吐いて捨てた。

ぐったり動かないままの先輩の頬をビンタして叩き起

こすと、奴は涙と鼻水でぐちゃぐちゃな顔を俺に向け、「もう無理……許して……」と哀願した。

「許してじゃねえよ、自分で汚したものは自分で始末しろ!」

俺は奴の顔を床の精液だまりに押し付け、舐め取るように命じた。先輩は抗う気力も無いようで、荒い呼吸を挟みながら、言われるままに自らの放出を舌で掬っては不味い味を飲みこんでゆく。

「いいか、今からためえの中に出すからな! お前はそいつを舐めながら、ケツに種付けされるのちゃんと感じとけよ!!」

起き上がる気力も無い身体に馬乗りになり、爛れた穴にずぶりと再挿入した。そのまま覆いかぶさるように体を重ねると、ぐずぐずのアナルの壁面を削り取るように奴を犯し始める。体重をかけてのしかかる度に、押しつぶされた肺から漏れた息が呻き声となってこぼれた。

任務をサボりがちになる奴の頭を床のザーメンに押し付け、「ちゃんとやれ!」と凄む。先輩は顔を精液にまみれさせながら必死に口を開いて舌を突き出したが、

その先端は対象を捕えることが出来ずに空を舐めるばかりだった。

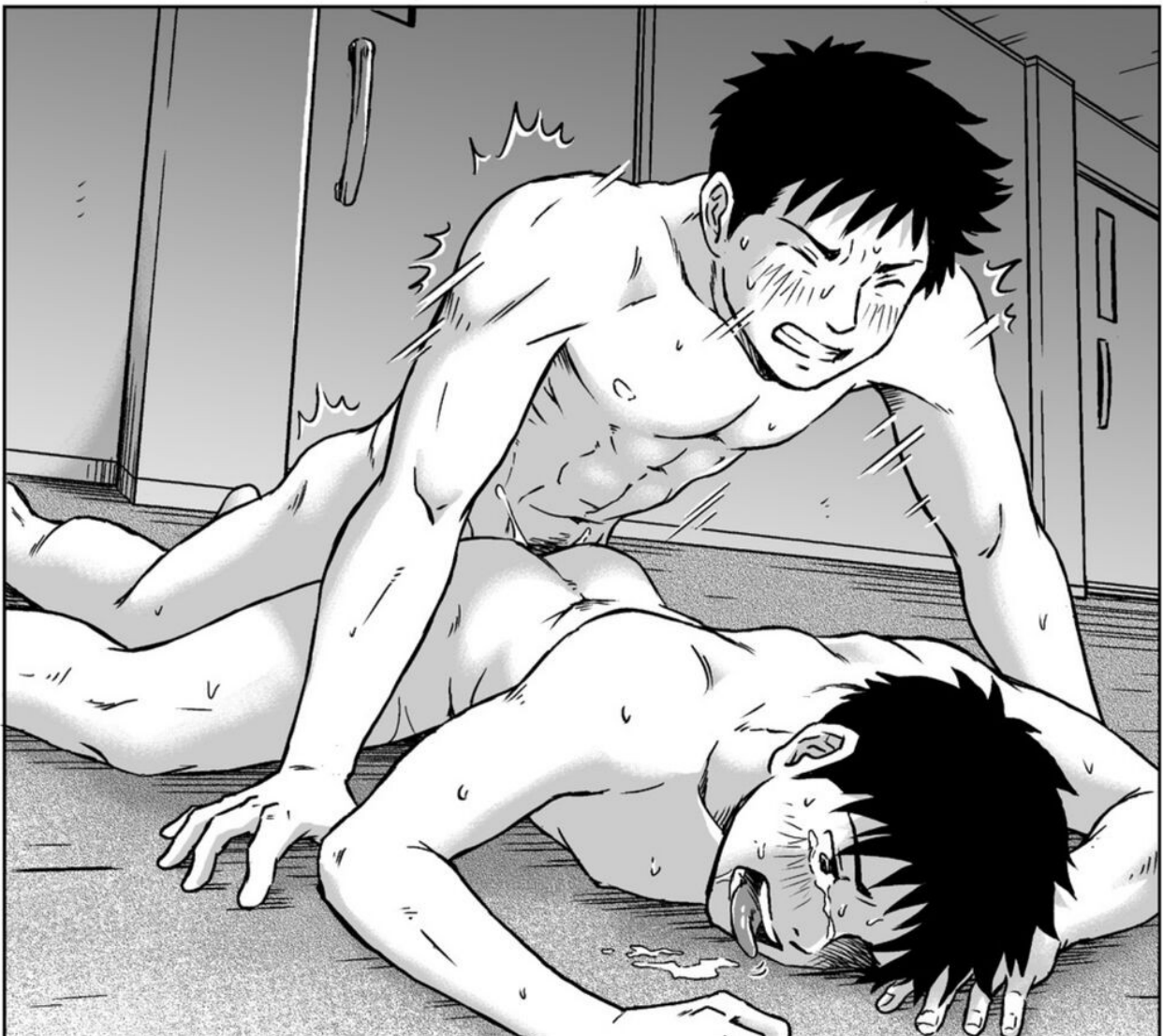
全ての鬱憤を晴らさんとばかり、セックスドールを相手するように乱暴に貪った。せめてこっちも射精くらいしないと、空しくて終われない気がした。こんなひどいセックスは初めてだ。

“畜生！ 畜生！ こんなつもりじゃなかった……なんでこんな風になっちゃうんだよ！”

逆恨みという単語が心の中にチラチラする。結局間違ったのは俺なのか……だがもう全ては手遅れだ。泣きたい気持ちを心の奥に封印すると、ただ性器からもたらされる刺激だけを無心で追った。

「クッ、出すぞッ!!」

小さくそう叫ぶと、人形の尻をきつくプレスして最奥に種付ける。苦い精液を



これでもかと注ぎ込んだ。

“オラ、コイツが欲しかったんだろ！ 慰み者にされて、種壺になれて満足かよ？”

クソッ、ノンケなんかと関わるんじゃ無かった。でもこれで全部終わりだ。明日からはもう、あんたの事なんか知らねえからな……っ。

そうして俺は白い涙の全てを、暗い闇の中に葬り去って果てた。

後味の悪い射精を終えると、先輩の身体から自身を抜き去り、尿道に残った精液を絞り出して奴の髪で拭いた。人形は身動き一つしないまま、人形のくせに涙を流して横たわったままだ。

「おい、漏らさないようにケツの穴締めとけよ。オレは風呂に行くけど、あんたもいつまでもそうしてると誰かに見られちまうぜ」

そう言い残すと、俺はかつて人間だった物をその場に残し、裸のまま階段を降りて風呂場へ向かった。

第五章

とつくに入浴時間を過ぎていた共同風呂は照明が落とされ、換気用の高窓から差し込む街灯の明かりだけがわずかに漆黒の闇を和らげている。俺は冷水のシャワーで股間を洗い流すと、保温が切れてぬるま湯になった湯船に浸かり、痺れた頭の芯がほぐれるのを待っていた。

入口の引き戸がカラカラと音を立て、人影が入ってくる。そいつはふらつく身体を何とか踏ん張って支えながら、こちらの視線を避けるようによろよると洗い場へ向かった。暗くてよく見えないが、汚された身体を洗い流し、尻に注がれた精を掻き出しているらしい。

随分と長い時間をかけて後処理を終えたそいつは、少し迷った素振りを見せた後、意を決したように俺のいる浴槽へ近づいて来る。隣に数メートルほど離れた場所で水音がし、湯船にさざ波を立てながらそのまま壁際の闇の中へと姿を隠した。

長い沈黙が訪れる。ぬるい湯に浸かりながら、重苦し

い空気の中で何かが起こるのか、それとも何も起きないのかわからぬまま、俺はただそこにいた。時折、天井に溜まった水滴が湯面に落ちて、ぱちゃんと水音が響く。

「……いつも、あんな風なのかよ」突然声がした。

声は小さくかすれて震えている。俺はその言葉じつと噛みしめ、随分間をおいてからやっと返事をした。

「んな訳ないでしょ、先輩に合わせてやっただけっすよ」

「どういう意味だよ」

今度ははつきりした声だ。声の主が振り向いたのか、湯面に立てられた波紋がこちらへ押し寄せて俺の肩にぶつかる。

「どうって、ああいうのが好きなんでしょ？ 隠したってわかるんだよ。あんたの本性がDMで、物みたいに扱って欲しかったのがさ。どうせ頭の中じゃ、俺をレイプ魔にでも仕立て上げて妄想してたんだろ」

俺は込み上げる怒りを必死で押し殺し、ギリギリ平静を装って答えた。

「そ、そんな事……」

「じゃあなんで男に興味も無いくせに手を出してきたんだよ？ 普通のノンケがチンポ啜えて勃起するなんて有り得ないだろ？ あんたはただ、ホモに犯される惨めで可哀そうな自分に酔いたかっただけなんだろうが!!」

最後の方は感情を抑えきれなかった。喉が詰まり、震えるむせび声のようになってしまったのが悔しい。俺は泣いてなんかない。なのに向こうにはそう伝わってしまうのが我慢ならなかった。

再度沈黙が訪れる。

「……悪かった」

消え入りそうな声が届くのに、ずいぶん時間が経っていた。

「別にいいっすよ。先輩はあれで満足したんでしょ、だってらもういいじゃないっすか」

これ以上この場にいると、洗いざらいぶちまけてしまいうそで、そしてそれはきっと却って自分がみじめになるだけで……。

「オレ、今夜はやっぱり床に寝る事にするんで、ベッドは先輩が好きに使ってください」

そう言っただけで立ち上がると、湯船を出て脱衣所へと向かった。「待てよ！」後ろで水音がして先輩が追って来る気配がする。俺は歩を速めたが、引き戸に手を掛けた所ですると腰に手が回され、後ろから抱きとめられた。

「ちゃんと話を聞いてくれ」

先輩が身体をぴったりと押し付けてくる。俺は彼を振り払おうか迷ったが、何故か身体が動かなかった。黙ってその場に立ち尽くしてしまう。

「ゴメン、オレ……お前の言う通りMっ気あるし……ご、強引にやられる妄想してたのも本ただけど……」

先輩の告白がグサツと胸に突き刺さる。

「でもちよつと違うんだ！ オレが頭ン中で想像してたのはその……っ」

「——何が違っつてんです？」

「それはつまりだなっ……」

先輩は言い淀んだ後、気合を入れるようにハッと息を飲み込み、そして続く言葉を乗せて一気に吐き出した。

「おっ、沖田に告白される想像してたっ」

「は?！」

俺は驚いて後ろを振り向こうとした。だが先輩は回した腕をぎりりと締め、俺の背に顔を埋めて決して表情を見せまいとする。

「ちょ、意味わかんねえっす、ちゃんとわかるように言っ
てくれないと!」

「だ、だからさっ、お前に好きだっつて言われて、でもオレはゲイじゃないからっつて断っただけど……それでも一度でいいからっつて無理矢理犯される感じのやつで……っ」

「……………」

「それで……流されてエッチしてみたら、相手が男なのに感じちやっつてどうしようみたいな……そ、そういうの興奮しちゃうだろ!」

いや、全然わからない。この人マジで大丈夫なのだろうか? どうも変な空想癖があるらしいが、ホモに言い



寄られて興奮するノンケって一体何なんだ？

混乱する頭を必死で整理していると、ふと自分の太ももに触れる固い感触に気がついた。ちよつと待て、これはどういう事なんだ。

「――何で勃起してるんです？」

「あつ、こ、これは……っ」

俺は力づくで先輩の腕を引き剥がすと、彼に向き直ってそれを見た。先輩は慌ててそそり立った股間を隠そうと握りしめ、真っ赤になって俯く。

「……だって今オレ、すっげーバカ丸出しじゃん。勝手にキモい設定作ってたのバレて、こんなの死ぬほど恥ずかしくて、そしたらこうなっちゃうんだよっ」

俺は呆れかえって大きな溜息をついた。本人も一応自覚はあるみたいだが、本当にバカバカしくて怒る気にもなれな

い。てかこいつは恥ずかしいと勃起するのかよ？

「なんかよくわからないけどもういいですよ。理解は出来ないけど、オレが思ってたのとは少し違ったみたいだし……。こっちも手荒くやり過ぎたのは謝ります。だからお互い今日の事は全部忘れて無かった事に……」

「だ、ダメだよそれじゃ!!」俺の言葉を遮って先輩が叫んだ。

「これで終わったら後々まで嫌な思い出になっちゃうじゃん。それは嫌なんだ!」

そこからしばらく間があった。

「——もう一回……やり直せない……かな？」

意外な提案に驚いた。あれだけひどい目に遭わされてまだ懲りないのか。あ、そもそもこいつはDM君だったんだっけ。

俺は迷った。確かにこのままでは苦い記憶がずっと後を引きそうだった。同じ職場の人間同士、わだかまりは残したくないとも思う。だが単にもう一度セックスすれば済むというものでもないだろう。俺自身まだ完全にモ

ヤモヤが晴れた訳じゃなかったし、次また失敗したらそれこそ目も当てられない。でも現状がもう最悪な訳で、だったらダメ元でもう一度試してみるべきなのだろうか？

「沖田、言ってる……」

「え？」

「セックスは独りだけが良くてもダメなんだって……だから、今度はそっちがしたいって思うエッチをやってみていいからさ」

俺はハツとした。そうだ、セックスと言うのは損得勘定なんかでするもんじゃやない。したければする、したくなければしない。そんな当たり前の事がわからなくなっていた。

目の前に立つホースケ先輩を、つま先から頭の先までじっくりと眺める。童貞をこじらせ、ハーレクオンもどきのエロ妄想に振り回される20代男というのはやはり退く。おまけに被虐趣味という厄介な性癖の持ち主だ。正直、手に余る気がした。

だがそれは同時に哀れを誘い、母性本能にも似た感情を俺に抱かせた。彼の持つ別の一面、普段の優しさや思いやり、誠実さもまた真実であった。人間は誰しも表と裏がある。しかしそれは一つの物を別角度から見ているに過ぎないのだ。彼は矛盾と混乱を同居させた、ある意味非常に人間らしい存在とも言えた。

勃起チンポを押し隠しながら、羞恥に潤んだ瞳で上目遣いにこちらを伺う男の姿に、つくづく変態だなあと溜息をつく。だが愛すべき変態だ。俺は決心を固めると彼にこう告げた。

「じゃあ、前から一度試したかったプレイがあるんですけど、いいですか」



一緒に裸のまま部屋に戻ると、先輩にベッドに横になるよう頼む。

「先輩にはつまらないセックスになるかも知れないけど……」

「いいよ、好きにやってみてくれよ」

デスクの引き出しから、随分前にネットで買ったきり、そのまま仕舞い込んでいたマッサージ・オイルを取り出す。それを横たわる先輩の身体……胸や腹、手足や股間にたっぷりと垂らしてゆく。ついでにローションも少し混ぜてみた。冷たい液体の感覚に、先輩がヒクヒクしながら耐えている。

俺は先輩に馬乗りになると、垂らしたオイルを全身に塗り拡げにかかった。揉み込むようにまんべんなく延ばしてゆくと、人肌の体温、滑らかな皮膚の感触、骨格や筋肉の形……彼を形作るものたちが掌を通して伝わってくる。

全身くまなく施される愛撫に、先輩は少し戸惑っているようだ。くすぐったいのか、時折ヒクツと脊髄反射が起る。それでも身体中を撫でさする手の感覚にエロスを覚えたのか、先輩のそこは期待にじわじわと首をもたげつつあった。

先輩をオイルでコーティングし終わると、自分の身体にもざっとオイルを塗り、彼の上に被さってその身を預

ける。オイルのせいで触れ合った肌がプルプルと弾性をもって感じられた。胸と胸、腹と腹をぴったりと合わせ、間の空気を押し出してしまうと、今度は吸盤のように貼りついて密着する。唯一、二人の怒張した凸部分だけが座りが悪く、股間でゴロゴロとこすれていた。

先輩の髪を撫で、頬に手を当てておでこをコツンとぶつけてみる。超至近距離で互いの瞳の中を覗き込んでみると、どちらからともなく唇が近づいていった。

先輩は舌を差し入れようとしてきたが、それをそっと拒否する。ディープキスにはまだ早いのだ。せいぜい舌先を合わせる程度で、唇が濡れないくらいのがいい。軽く触れ合わせたまま口を開け閉めしていると、なんだか池の鯉みたいでちよつと可笑しかった。

「ホースケ先輩、かわいい」

俺の発した言葉に、先輩は頬を赤らめながら「な、何だよ急に」と照れてみせた。

「先輩が好きって事ですよ」

うなじに腕を回し、ぎゅつと抱きしめて言う。驚いた

先輩の身体が硬直して固まった。

「えっ、あの……マジで言ってる？」

「大マジですよ。ねえ、先輩も言ってくださいよ、オレが好きだって」

ホースケ先輩は息を飲み、何も言えなくなって黙りこくってしまった。動揺してどうしていいかわからないという表情だ。

あーあ、やっぱそう上手くはいかないか……俺は仕方なく種明かしをすることにした。

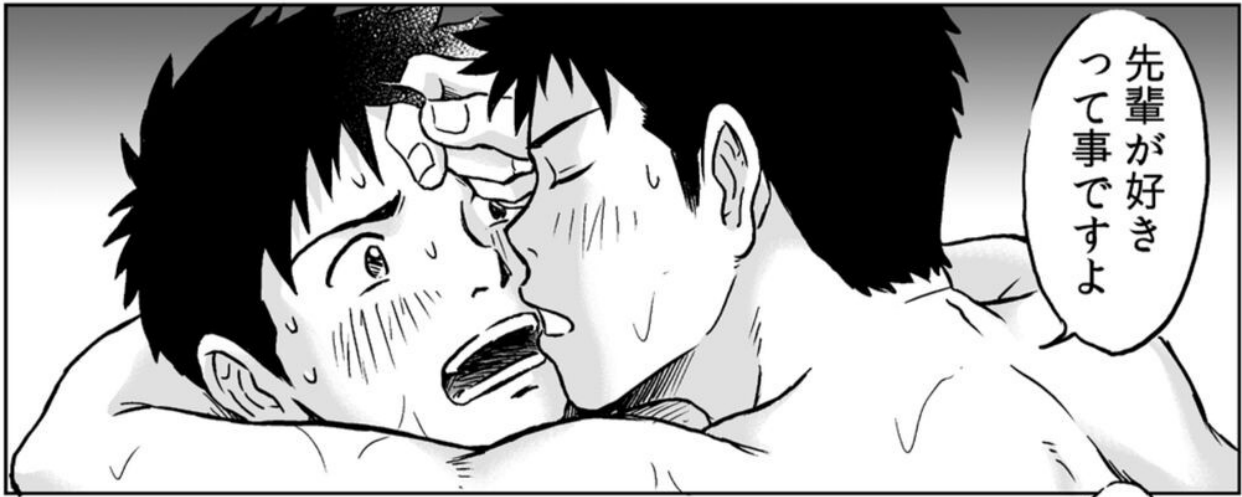
「フフ、本気にしちゃいました？ これはそういうプレイなんですってば」

「えっ!？」

「ねえ先輩、ポリネシアン・セックスって知ってます？」

「名前だけは聞いた事があるような……でもどんな事するのかが全然……」

「こうやってね、リラックスした状態で愛撫したり、好きだとか愛してるとか語りかけてお互いを慈しみ合うらしいです。挿入は最後の最後まで無しで……それまですつとこんな前戯みたいな感じが続くんです」



「そ、そうなんだ……」

「だから先輩も言ってください、嘘でいいんで」

先輩の額にかかる髪を掻き上げ、頬に軽くキスしながら言う。だが嘘が苦手な先輩は良心の呵責に苛まれていくようだ。別に一夜限りの遊びなんだから、そんなに重く考えなくてもいいのに……相変わらず真面目な人だ。

「先輩？」

俺が尚も促す。先輩はごくつと生唾を飲み込み、そしてゆっくりと俺の背に腕を回すと、ぎゅつと抱きしめてくれた。

「す……きだ」

カラカラの喉から絞り出されたかすれ声で、彼はそう言った。

「——本当に？　嘘じゃなくて？」

「う、うん。ほんとうだよ……嘘じゃない」

ありがとう、嘘でも嬉しいよ。いや、先輩は嘘をつけないっばいから、LOVEじゃなくてLIKEの意味に置き換えてみたのかも知れない。それでも俺には十分だ。

お返しにこちらも先輩を力一杯抱きしめる。二人で固く抱き合うと、誓いの口づけを交わした。今夜だけ、俺たちは愛し合う恋人同士となった。

「——なあ、この後はどうすればいいんだ？」先輩が照れ臭さそうに尋ねる。

「そうっすね、一応ネットにはご先祖様に思いを馳せながら、水平方向を意識して相手の存在を愛おしむって書いてありましたね」

「先祖!？」

「まあ多分、巡り会えた奇跡に感謝しろって事じゃないかと……」

俺はネットに書かれていた通り、両親や祖父母、親友や今まで係わってきた多くの人々の顔を思い浮かべた。考えてみれば、自分は多くの運命の糸の結節点だ。目の前にいる先輩だって同じだろう。ごくありふれた人間一人の後ろには、膨大な旅の軌跡が隠されている。その結果を粗末に扱っていい訳は無いのだ。

気が遠くなりそうな運命の大海に思いを馳せながら、俺は水平方向を意識しろとの言葉に従い、ゆっくりとした動作で互いの身体を擦り合わせてみた。刺激を与えすぎて下品にならないよう、あくまで最小限の動きだ。

何というかこれは、まるで鑄型を取るかのように、先輩の姿形を自分の身体に写し取る感覚だ。この小さな肉体に彼の全てが納められているのだと思うと、なんだか神秘的な気持ちになる。俺の形も受け取って欲しい……オイルでぬめる肌を相手に擦り付けると、相手に自分の形を刻み込む。俺たちは二匹の軟体動物のようにねつとりと絡み合い、睦み合った。

「は、あ……沖田あ……」

「うん？」

「これ……やばい……」

俺を見上げた先輩の顔は、上気してとろんとした目をしている。やれやれ、元来妄想リッチで流されやすいタイプの彼は、早速エロティックな雰囲気当てられてしまったらしい。

「……ホースケ先輩、すっげえエッチな顔してる」

「い、言うなよ……んんっ！」

「何です？」

「お、お前の乳首がつ……!!」

スライド運動のせいで二人の胸の突起が衝突し、反発してプルンツと弾けた。その刺激に先輩は「ンツ！」と歯を食いしばる。そっか、俺は乳首で感じた経験は無いんだけど、先輩はこも性感帯なのか。

再度そのポツチに向けてゆっくりと接近を試みる。先輩の突起に俺の突起が乗り上げ、中心がぴたりと重なり合った所で静止した。凸と凸を押し付け合うと、お互いが「むにっ」とめり込んで変な感覚がする。意識が一気にそこへ集中し、何だかこっちまでムズムズしてたまらない。あれっ、もしかして俺まで少し感じちゃったかも……。

先輩の方はもっと明確に性感を得て震えていた。まどろっこしい乳繰り合いに居ても経ってもいられなくなり、腰をクニクニと振って股間を擦り付けてくる。そこはなるべく刺激しないよう、ずっと避けてきた場所なの

だが。

「ダメつすよ、そんなにエキサイトしちゃ」

「だって、もうたまんねっ……コレ、もう欲しいってば!!」

こんな風に求められて嬉しくない訳が無い。だが俺は首を振って要求を拒否した。

「リラククスして……あと30分は頑張りましょう、ね？」

「そんなっ……切なくて死んじやうよお」

渴望の涙を浮かべながら、先輩は少し幼児退行しているようにも見える。俺がスライドを止めてしまったので、彼は自ら動く事で少しでも刺激を得ようとしていた。俺の腰に脚を絡め、尻を振って求めてくる。

本音を言えばこっちだってかなり苦しかった。大分前から、先輩の熱く蕩けた穴に自身を埋めてしまいたい衝動を必死に堪えていたのだ。だが俺は内から込み上げる欲望を断腸の思いで断ち切り、先輩をガツチリホールドしてその動きを制止した。

「我慢して……切ない気持ちを味わうのが目的なんですから」

「やだっ……もう嫌だあ……」

「それじゃ、またアレ言ってくださいよ、オレが好きってやつ。そしたら少し動いてあげますから」

それを聞くなり先輩は手足をきつく巻き付け、身体を震わせながら叫んだ。

「好きだからっ……ホントに、沖田の事が、オレツ……!!」

俺は先輩の髪をぐしゃぐしゃに撫で回すと、約束通り少しだけ動いてやった。二人の生殖器官が触れ合い、互いを愛撫する。ほんの少しの刺激がいつもの何倍にも増幅されて伝わってくる。先輩が「はああ……ン」と熱い愉悦の吐息を漏らし、俺も苦しく切ない呻き声を上げた。

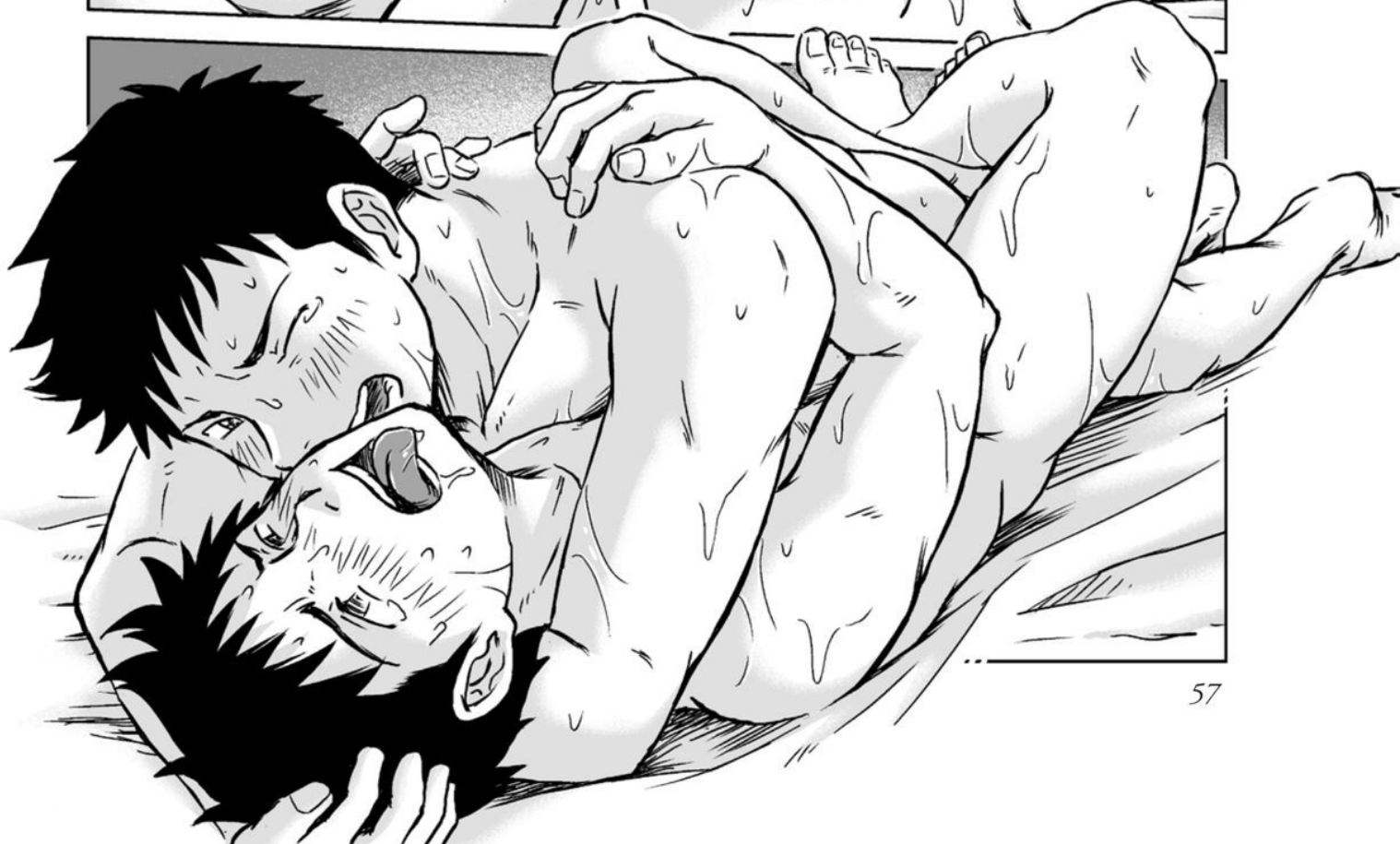
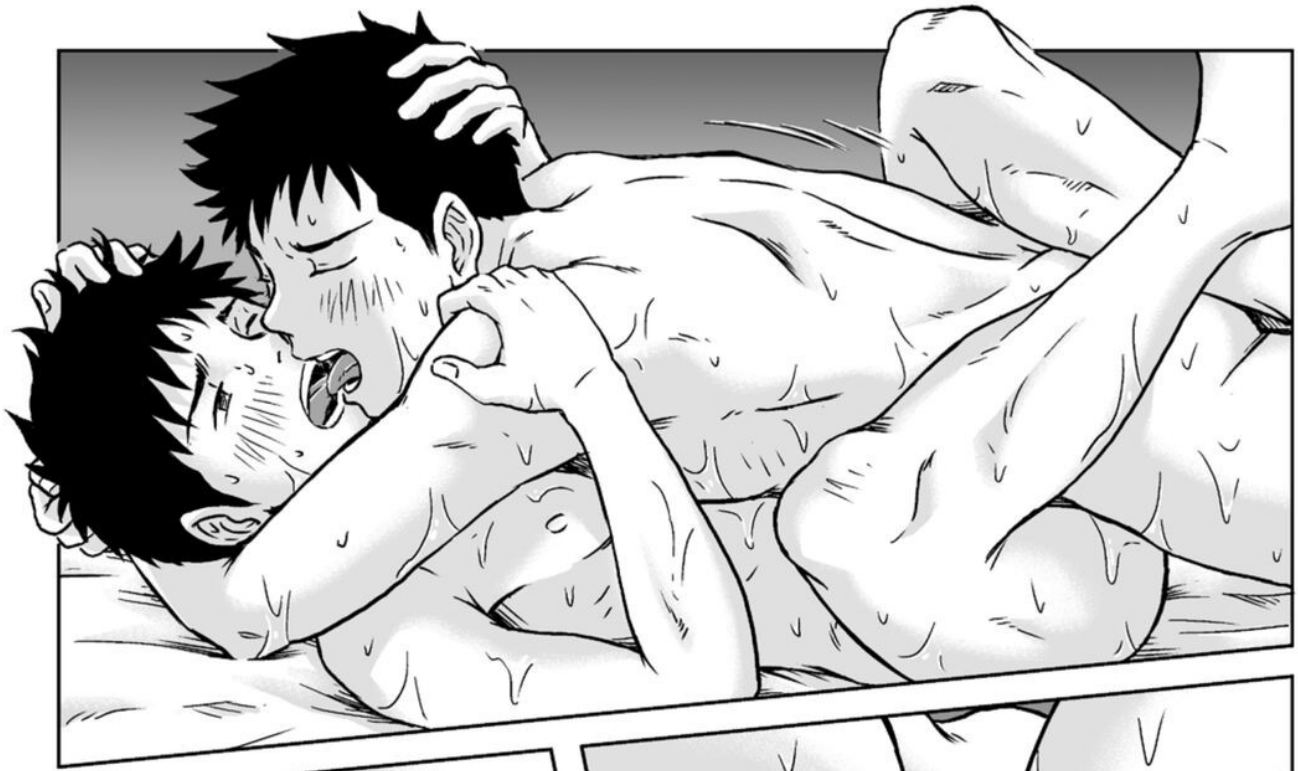
「沖田……好き……もっとして」

「下の名前で……一起って呼んでください」

「ああ……カズキ……カズキっ、すげー好き……っ」

「オレも、ホースケ先輩の事めっちゃ好きっす」

先輩はうわ言のように幾度も俺を呼んでは愛の言葉を口にしていた。それがかりそめの愛であっても構わない。睦言の度に恋人の敏感な部分を自身の屹立でそっと撫ぜ、



共に切ない性の喜びに震えた。彼の可愛らしい突起を吸

い、首筋に口づけては花びらのような跡を残す。

第六章

冷静な者には、こんなママゴトみたいなセックスは馬鹿馬鹿しく思われるかも知れない。自分だって普段ならそう思うだろう。だが俺たちは麻薬患者のようにすりとりとんでしまっていた。実際、脳内麻薬みたいなものが駄々漏れだったに違いない。

いいのだ、時にはこんな陶酔も必要だ。一夜限りの恋に耽溺しない方がどうかしている。愛と欲望に焦がれ、僅かずつしか与えられない悦楽にじりじりと追いつめられながら、俺とホースケ先輩は南国ポリネシアの海に溺れていった。

約束の30分を過ぎた頃には、二人ともすっかりのぼせて呆けてしまっていた。ポリネシアン・セックスというのは、ただ抱き合っているだけなのに物凄いエネルギーを消耗するのだと知った。体感上はもう何時間もまぐわっているような気がする。愛の言葉の交換もいつしか無くなり、二人ともただ「ああ……ああ……」という呻き声を上げるのみで、時折オイルに塗れた熱い身体でのたうってみせるだけだ。

初めの内こそ鋭く突き上げていた股間からの欲求は、やがて遅行性の毒のように全身へ回り、慢性疾患のごとく鈍く爛れた疼きとなった。もはや挿入や射精といった直接的な行為よりも、相手とどろどろに溶け合ってしまったという観念的な欲求に支配されていた。それが決して叶わない夢なのはわかっていたのだが……。

「——先輩、そろそろ終了にしませんか……」

そう問いかけるも、ホースケ先輩は蕩けきった瞳で俺をぼんやりと見上げるだけだ。

「なんかオレ、もうこれで終わっていい感じになっちゃったんですけど、先輩はどうします？もしイきたいんだったら、手か口でイかせてあげますけど……」

先輩は融け落ちていた意識を必死でかき集めているらしい。しばらく待ってその作業がようやく終わると、じつとこちらを見上げてぼそぼそと発した。

「……挿れたくねえの？」

「んー、そういう訳でも無いんですけど、でもここで止めた方がいい気がして……今ならきれいな感じで終われるんじゃないですか？」

「……………」

しばらく考え込んだ後、先輩は俺の首に腕を回して耳元に囁いた。

「オレ……やっぱ最後までしたい。ダメかな？」

俺が黙ったまましていると、困った様な顔をして続ける。

「ポリネシア、すごい良かったし、オレも満足してるけど、でも……」

「でも？」

「やっぱ出さないと熱が退かないっていうか……それな

らちゃんとカズキと一緒にイきたいし、そ、それにさっ先輩が耳まで真っ赤になって言う。

「最後にもう一度、カズキの……中に欲しいよ」

俺は困ってしまった。そんな風に言われると、やっぱ挿れたい気分になってくる。鈍っていた性器の感覚が戻ってきて、隣で触れ合う先輩の屹立と頷き合った。

だがその欲求に、俺の中の直感が激しく警鐘を鳴らしてくる。『やめておけ、引き返せなくなるぞ』と。俺はふーっと大きく息を吐くと、必死の思いで未練を断ち切り、ローション交じりのオイルの糸を引きながらその身を引き剥がした。温かく心地よい肌と接していた部分に、ひやりと冷たい外気が入り込む。

先輩の上から身を起こすと、脇にどいてゴロンと仰向けに寝転んだ。隣に視線をやると、「そんな……」という表情を浮かべたホースケ先輩とかち合う。

「やっぱダメです。挿れたらきつと、本気で先輩が好きになっちゃいそうなんです」

俺は笑ってそう言った。上手く笑顔を作れているか自

信が無かったが、重くならないように、先輩に余計な負担をかけないように、精一杯の努力をしてみた結果だ。それを聞いた先輩はのろのろと起き上がり、俺の脇に座り込むと、俯いてじつと考え込んでしまった。あーあ、やっぱ重くなっちゃったか。ゴメンね、俺なら大丈夫ですよ、まだそんなに傷は深くない……はず。

「時間……少しくないかな」

先輩が発した言葉に、俺は耳を疑った。慌ててそちらを見上げると、彼の真剣な視線とぶつかる。

「な、何言ってるんですか、先輩ノンケでしょ？ 無理ですって!! ……あの、今は気分が舞い上がってそんな風に思えるのかも知れないけど、異性愛の人が同性愛に染まるとか、あれはただのフィクションですからっ」

動揺する俺を、先輩が静かに眺める。なんだか悟りを開いたような落ち着ぶりが却って恐ろしい。彼は瞼を閉じると、ゆっくりとその口を開いた。

「じゃあきつと、元からオレの中にそういう要素があったって事だよ」



「——オレね、女の子ってきれいだし、自由に楽しそう
で可愛いなって思うけど、でも昔からチンコ挿れたいっ
て考えた事無いんだよね……中学の頃からずっと、犯す
より犯されたいって思いが強かったんだ」

「そ、それは先輩がMだから……っ」

「そうかも知れない。今まで男同士なんて一度も考えた
事無かったし」

「でしょ、やっぱ勘違いですって！」

「どうだろ、自分でもまだよくわかんねえんだよ。でも
カズキとのエッチは本当に良かったし、男同士でも興奮
するんだって知っちゃったから……」

先輩が困惑した顔で俺を見る。いや、本当に困ってい
るのはむしろこっちの方だ。

確かに、先輩は強固な異性愛者とは言い難い感じはす
る。そもそも異性愛と同性愛の境界に明確な線引きは不
可能で、両者の間はグラデーションのように曖昧なもの
らしい。各々がその勾配のどこかに位置しているのを、
社会生活と折り合いを付けるべく、自分でどちらかに規

定しているのだと何かで読んだ。

思春期からの長い葛藤の中で、彼は自らのセクシャリ
ティを“尻を犯されるのが好きな異性愛者”と規定し
たのだろう。だがこのセックスで俺がそれを破壊し、再
びグレイゾーンの中へ戻してしまったのかも知れない。

急に恐ろしさが込み上げてくる。二十歳過ぎてから自
分の性自認を変えるのはきつと大変な事だ。その転向が
もたらす混乱に、とてもじゃないが責任を負う勇氣は無
かった。

「ねえ、カズキから見てオレはどっちだと思う？」先輩
が訊ねる。

「む、無理っす！ オレにはそんな決められない
し、そういうのは他人がどうこう言うモンじゃ無いで
しょ!!」

俺の剣幕に先輩は驚いた顔になり、「悪い、そうだよな」
と小さく言った。そして「自分の事は自分で決めなきゃ
ね」と、自らに言い聞かせるように呟いた。

先輩がのそりと腰を上げ、俺に跨ってくる。

「巻き込んでゴメン。でも自分の事、ちゃんと知っておきたいんだ」

どうしていいのかわからず、ただ怯えてされるがままでいるしかなかった。先輩は萎えかけていた俺を扱いて硬度を回復させると、後ろ手で自分の尻に宛がった。ゆっくり腰を落として体重を乗せるにつれ、行き場を失った先端がじわじわと彼の門を開いてゆく。先輩の顔が歪み、「はああ……」と大きく息を吐いた。

むりつと亀頭が肉を押し分けて潜り込む感覚があった。先輩は機を逃さず、そのまま後続を自身の中へ強引に誘いさなう。肉壁をかき分けながらずぶずぶと押し入ってくる圧迫に「んあああ……っ」と悶えながら、それでも行為を止める事はなかった。

全てを飲み込んでしまうと、先輩は倒れ込むように俺の胸にその身を預けてきた。

「うう、痛てえ……カズキの、デカ過ぎ……」

「……………」

「けどオレ、やっぱチンコ挿れられるのすげー好きみたい。なんか、満たされる感じがする……」

先輩は尻をもそもそと動かし、自身に埋め込まれた他人の感触を確かめている。中で腸がうねって俺を締め上げてきた。その艶めかしい愛撫に、嵌り込んだモノがビクンビクンと勝手に反応してしまう。

「あの……カズキ、もしかして怒ってる？」

ずっと黙ったままのこちらの態度に、先輩が不安気に俺の目を覗き込む。

「別に怒ってる訳じゃ……ただ怖いんです。オレのせいで先輩の人生狂わせちゃうんじゃないかって」

俺は正直にそう言った。先輩は首を左右に振ると「自分の選択肢を試したいだけだから」と返す。「オレもカズキを好きになりたいって、そう思ったんだ。まだ約束は出来ないけどね」と。

「——オレは好きです、抱輔先輩の事、マジで」

彼の目をまっすぐに見て、ストレートに告白した。さっきまで狼狽ろうたいえていたのが嘘のように、意外な程肝が据わって冷静だった。先輩は俺の胸に顔を埋め、首に腕を回してぎゅっと力を込めると「ありがとう、嬉しいよ」

巻き込んで
ゴメン

でも
自分の事、

ちゃんと知って
おきたいんだ



は
あ
あ...



と呟いた。

「ねえ……そろそろ動いて欲しいんだけど……じっとしていられるのツライ」先輩が熱を帯びた目で訴える。

「でも先輩、自分の気持ちを確かめたいんですよ。だったら動いたら意味無いんじゃないですか？ それじゃただのアナル好きって結論で終わっちゃうんじゃない？」

俺は先輩を抱いたまま後ろへずって、ベッドの背に上半身をもたせ掛けた。膝を曲げ、下腹部の谷間に先輩の尻を落とした体勢で固定する。彼が自分で腰を振るのを防ぐためだ。

「——ポリネシア、続けましようか」



ポリネシアと聞いて先輩の顔が引きつった。

「あ、あれはもういいよ、疲れるしすごい苦しいんだって……」

「オレだって同じです。でも気持ちを確かめるなら一番いい方法じゃないですか？ あ、今度は嘘をつくのはダメ

ですからね」

先輩の身体をしっかりとその胸に抱き留め、互いの結合をじんわりと味わう。嵌り込んだ性器の感覚が研ぎ澄まされ、抱き合うだけだった先程までとは比べ物にならない切なさとしじれたさが俺たちを見舞った。

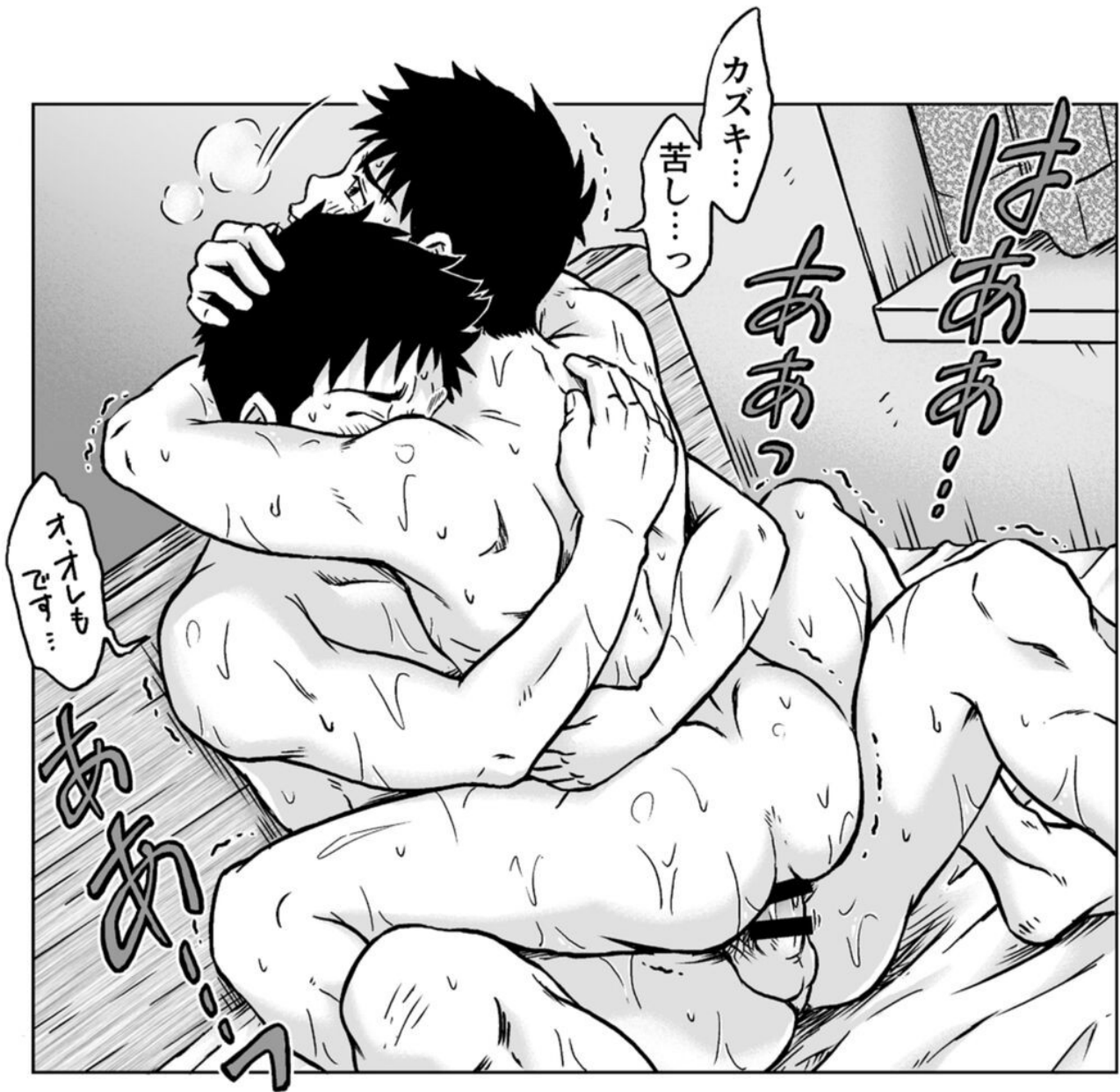
合わせた胸から早鐘のような彼の鼓動が直に伝わってくる。彼の尻がきつく俺を締め付け、刺激を求めて腸が絞り込むようにうねっていた。腹に接した先輩の欲望が、絶えずビクビクと震え続けている。

「カズキ……もう苦しいよお……」

「オレもです……」

果たしてセックスで愛を確かめることが出来るのかと問われると、正直よくわからない。だが俺たちはそれにチャレンジしていた。恋愛とセックスは別だという意見も（特に男にとっては）一つの真理だと思う。それでも時には、二つが重なり合う場面もあるのだと信じてみる事にした。

下半身から突き上げる苦しさは純粋な性の衝動そのものだ。対象を選ばずただイきたい、射精したいというだ



けの原始的な欲求。そこに胸を締め付ける恋慕の情を乗せる。二つの激情は混ざり合い、増幅し合って、俺たち二人を真に苦しめた。

だが苦悶が強ければ強いほど、より深く相手を想っているような気分がする。それに耐える事こそが、愛の証明のような錯覚もたらされる。まるで俺までもがマゾヒズムの虜になってしまったかのようだ。

はあっ、はあっと大きく空気を飲み込みながら、潤んだ瞳で互いの痴態を見かわした。たまらず口づけてみるが、長くは息が続かない。たまに汗とオイルでぬめる身体を少しだけ滑らせ、差し込まれた連結から湧き上るわずかな恍惚を分かち合う。だが次の瞬間にはその何倍もの副作用が身を焦がす責苦となって押し寄せ、二人を心底から苛むのだった。

「んぐっ……くっ、うううーっ」

突然先輩の背が反り返り、しがみついた手足が俺を締め上げた。喰い千切られそうな程にきつく穴を収縮させ、全身をブルブルと震わせて天を仰ぐ。

「カ……ズキっ、も、もうダメ……っっ!!」

「待って、まだ我慢してっ……」

だが願いも空しく、先輩は絶頂の嘆きを発して痙攣した。俺を包む腸壁が周期的に収縮を繰り返し、腹に挟み込まれた彼の屹立がビクンビクンと跳ねている。

「クソッ、一人だけズルい、いくなら一緒にイきたかったのに……!!」

俺は無念さを噛み殺しながら、それでも彼の身体をガッチリとホールドしてその苦しみと恍惚を抱きしめてやった。

「あっ、アアッ、アア……ア——……」

先輩の絶頂は長く長く続き、少しも収束する気配を見せなかった。

さすがにおかしいと思い、不安になった俺はしがみつ

く彼を引き離すと、その頬を叩いて呼びかけた。

「せ、先輩大丈夫ですか？　なんかヤバい感じになってます？」

ホースケ先輩は苦悶にしかめていた瞳をようやく開くと、ボロボロと涙を零しながら喘いだ。

「ダメっ……おさまんな……っ、ぐるじい……よおっ……!!」

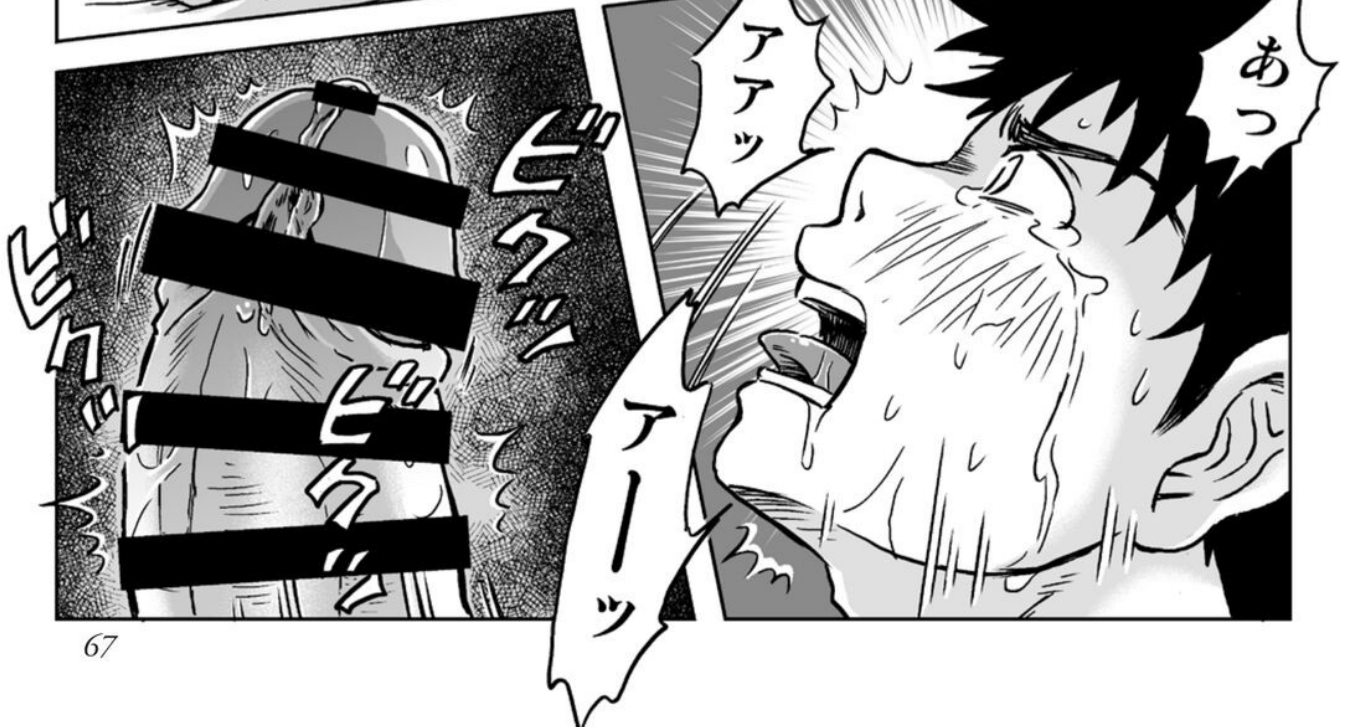
俺はハツとして腹に接した部分を確かめた。そこは彼の放ったザーメンでべっとり……のはずだったのだが、手に触れたのは大量の透明な先走り液だけだった。

「え、これ……もしかしてドライやつですか!?　すげ、先輩ってドライでイケちゃう人なんだ？」

そう問いたしたが、彼は終わらない絶頂に狂いながら「し、知らない……!!」と首を振った。

ドライ・オーガズム——射精を伴わない絶頂というものを話には聞いていたが、実際に見るのは初めてだった。自分とのセックスで相手に未知の体験を与えてやれた事に、思わず嬉しくなってしまう。

しかし前立腺スポットには直接当てていないはずなの



に、どうして達してしまったのだろうか？ もしや俺への想いが昂揚して……なんて、それはさすがに自惚れ過ぎというものか。中学生でもあるまいに、いくら先輩でも観念だけで絶頂を迎えるのは無理だよな……。

「カズキっ、苦し……っ、何とかしてよおっ!!」

俺が優越感に浸っていると、堪りかねた先輩が救いを求めて叫んだ。そうだ、さすがにこの声は何かしなげれば。俺は先輩の口をキスで塞いだ。暴れる身体を抑え込み、むずがる赤ん坊を宥めるように背中をトントンして慰めてやる。髪を撫でながら「大丈夫、オレがついているから頑張つて！」と心の中で呼びかけた。

実の所を言うと、俺の方もそんなに余裕がある訳じゃなかった。ドライ中の先輩は、まるで膣痙攣を起こしたかのように俺をギリギリと締め上げてきたからだ。そもそもアナルの中というものは、入り口はきついが内部は割と広い空間になっているのが普通だ。それが身体の危機的状況を察してか、彼の内部は奥深くまで収縮を試み、熱く蕩けた粘膜がぴっちり俺を押し包んで離さない。

さらに腸全体がグニツ、グニツ振れて動き、その度に腸壁のひだが俺を甘美に絞め殺そうとしてくる。

緩慢でねちっこい絞殺なのが余計始末に悪い。いつそ激しい刺激なら耐えられるものを、性感神経に擦り込むように与えられる生き地獄めいた快楽に頭が狂いそう。一瞬でも気を抜こうものなら射精してしまいそうになるのを、意識を逸らして必死に堪えた。苦しみを分かち合う内に、愛おしさが込み上げて泣きたくなる。震える先輩の肩を抱きながら、腕の中にあるものが全てに勝る大切な存在だと思い知った。

畜生、これはもう本物じゃないか！俺は自分がとつくに戻れない所まで来てしまったのを悟って涙した。

ようやくドライの発作がひと段落すると、先輩は400メートル走を走り終わった陸上選手のようにゼエゼエと荒い呼吸にむせ返り、涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔で「い、いきたいっ、カズキ、イかせてよおお……」と懇願した。

いや、ダメだ。俺の先輩への気持ちはこんなもんじゃ

ない！ この人を喜ばせるためならば、俺はまだまだ頑張れる!!

とつくに爛れてしまったホースケ先輩のアナルに、ジュブジュブとスローなストロークを与える。今度はスポットを強く押し上げ、確実にドライへの高みに追いつめていく。

「違っ……それダメっ、やだ怖いっ……あ、あ、……また……ッッ」

一度ドライ・オーガズムを経験した先輩の身体は早速そのコツを学び取ったらしく、仕上げにグイッと深くえぐってやると、たちまち気の毒な彼を伴って悦楽の奈落へと堕ちていった。そして俺もその罪の報いとして、愛しいペニスサックを抱きしめながら後を追う事となった。



悪夢のような快楽はその後も幾度となく発作を繰り返
し、先輩を苦しみ抜かせた。終いにはただ刺激に反応す
るだけとなり、嗚咽を漏らしながら涙を流す廃人のよう
に成り果ててしまっている。

「——先輩、先輩っ、……聞こえますかっ？」

頬を叩いて呼びかけると、生気の抜けた瞳がぼんやり
と俺を映す。

「これで最後にしますから、起きて下さい。次にドライ
に入った所で扱いてあげるんで、一緒にいきましよう」

ホースケ先輩の顔が恐怖に怯える。

「イヤだ、ドライはもう無理、やだよっ」

「そんなこと言ったって、先輩ちよつと腰振ったらすぐ
ケツイキしちゃうじゃないですか。こっちだつていきた
いし……オレのためにも頑張ってくださいよ」

「カズキの……ため？」

「そう、最後は二人で気持ち良くなりたいたいです」

俺のために身を捧げるといのが、彼の琴線に触れた
らしい。先輩は目をギュッと閉じ、震えながらも覚悟を
決めてコクリと頷いた。よし、その献身に応えるために

も、最高の瞬間^{クライマックス}を味あわせてやりたい。

俺は先輩を抱いたまま身を起こすと、対面座位の体勢
から彼だけそつとシートに横たえた。男女の場合と違つ
て結合部が後ろ寄りだから、必然先輩の背が弓なりに
アーチを描く。48手でいう“吊り橋”に少し近いかも
知れない。経験上、これが最も前立腺スポットを強く押
し込める体位なのだ。

片腕を後ろに付き、もう片方は先輩の太ももにかける
と、ゆっくりと挿入を開始する。龟头を上向きにして前
立腺に押しつけるよう当て掘りすると、すぐに苦しげな
ヨがり声をあげて哭き始めた。

すっかり感じやすくなってしまったその場所は、やつ
とありついた明確な刺激に歓喜し、あつという間にオー
ガズムの大津波となつて本人を飲み込んでゆく。

「んにいいいいいいー……」

歯を食いしばる先輩から断末魔の悲鳴が上がった。俺
に触れていた肉壁がインギンチャクのように収縮し、捻
転を起こすのではないかと思う程のたうって、その形を
絶えず変化させ続ける。狭くなつてしまったトンネルに



圧迫され、ピストン運動がしにくい。だがそれを強引に押し開いて突き動かすと、今まで経験した事の無い強烈な刺激が牙を剥いて俺の敏感な部分を襲った。

“やばいつ、やば過ぎるッ!!”

性感に恐怖したのは初めてだった。ビリビリと雷撃のように脳を直撃する快感に怖気が走り、腰が引けてそれ以上突き入れるのを躊躇してしまった。無理だ、これ以上やったら精神がどうかしちまう!!

「カズキッ、カズキッ、……早く来てッ!!」

自分と呼ぶ声にハッと目を見開くと、先輩が腕を伸ばして俺を求めていた。

“そうだ、ホースケ先輩のためならば、この恐怖にだって打ち勝ってみせる!!”

差し伸べられた手を掴み取ると、指を絡めて固く結んだ。その腕を命綱代わりに手繰り寄せ、意を決して大きく打ち込む。動きとタイミングを合わせて、向こうも俺の鼠蹊部へ尻を打ち降ろしてきた。

「くあっ、……ああ、あああッ!!」

会陰えいんの疼きが最高潮に達し、今にも爆発寸前だ。もう

いい、もういいよなつ、先輩、ホースケ先輩っ……。

俺は彼の張り詰めた屹立を握ると乱暴に扱き上げ、一番深い場所を力の限りに突き上げた。

「ああーっ、ああーっ、ああーっ!!」

部屋にこだまする絶叫は果たして先輩のものか、それとも自分が発しているのかわからなかった。頭の中が真っ白になって何も考えられなくなる。遠い感覚で、握りしめた存在が脈動し、熱い激情がほとばしっているのを感じた。

“良かった……先輩、イけたんですね……”

そしてふと、自分も相手の最奥へと噴き上げている最中なのに気がついた。放出し続ける先輩から手を離し、倒れ込むようにして彼の身体を抱きしめる。そして心の中で最愛の者となった名を呼びながら、残りの愉悦を全身全霊で味わった。





エピソード

それからの事を話そう。

あの日、つまり俺と先輩が初夜を過ごしたあの晩、渾身の射精を終えた俺たちはそのまま息絶えるように意識を失った。シャワーを浴びるどころか、ベトベトの身体を拭く事さえ億劫で、折り重なって布団に潜り込むなりあつという間に睡魔に飲まれていったらしい。ポリネシアン・セックスと、ドライ・オーガズムの併用は想像以上に過酷過ぎたのだ。

スマホの着信音でようやく目を覚ました時には既に陽は高く昇っており、慌てて飛び起きると電話の主は平謝りする羽目になった。

「す、すみません寝過ごしましたっ!! 今から速攻出社しますので……え、寝屋川先輩ですか? あ、あのっ、オレが起こしそびれたので、多分まだ部屋で寝ているんじゃないかと……」

何度もスマホに向かって頭を下げながら上司の電話を



切ると、まだ隣でぐったり果ているホースケ先輩を叩き起こしにかかった。俺たちは仲良く大遅刻をかます事となり、二人が会社に到着したのは昼休みをとうに過ぎてからであった。

そうそう、先輩の小便ベッドだが、これはどうやっても臭いが残ってしまったて処分せざるを得なかった。責任を感じた俺が弁償を申し出たのだが、先輩は頑として代金を受け取ろうとはしなかった。

そのくせ「今は金が無いから」と言って、一カ月経つた今もまだ新しいベッドを買う素振りを見せない。それじゃあ先輩は今、毎晩どこで眠っているのかって？ そんなの決まっているじゃないか、ホースケなら毎晩俺の隣で寝ているよ(笑)

いやいや、冗談はさて置いて真面目にその後の顛末を話すと、肝心の先輩からの答えはまだ貰っていない。そりゃあ早く返事が欲しいのが正直なところだが、物事はなるようにしかならないものだ。

このひと月の間、ホースケ先輩は俺の部屋に入り浸っ

て同棲状態のようになっていたし、三日と置かずにセックスもしているのだが、だからと言って正式に恋人同士になつたという訳では無い。まあ、今はお試し期間という事なのかなと、気長に待つことにしている。

唯一気がかりだったのは、二人の同居が寮の他の住人達に変に思われるのではないかとこの点だった。だが彼らは「目覚ましのやかましい音を聞かずに済んで助かるよ」と笑って言うだけだった。まあ壁の薄いこの寮で、きつと夜中のアレな声とかも漏れてるだろうし、隣近所の何人かはとつくに気付いていておかしくないのだが、それでも特に避けられたりという風も無く済んでいるのは本当にありがたい。

そしてもう一つ変わらなかったのは、先輩の寝起きの悪さだった。毎朝あれやこれやと奮闘して先輩を叩き起こすのは、相変わらず俺の役目のままだ。そしてそれは今日、たった今この時もまた繰り返されようとしていた。

「先輩、起きて下さい！ ホースケ先輩ってば!!」

満ち足りた顔で眠りこける先輩から布団を奪い取る。素っ裸の股間にそそり立つ朝勃ちは今日も元気だ。ああそうだ、一つだけ以前と違うのは、先輩は最初からパンツを穿かずに眠るようになってしまった点だ。俺への遠慮が無くなった彼は、今や完全裸族に進化を遂げたのだった。

「もう、いい加減起きて下さいよ！　いくら休みの日だからってもうすぐ昼ですよ？　たまにはシーツだって洗いたいのに……」

俺がどんなに手を尽くしても、こいつは惰眠を貪り続けて起きようとしな。こうなったらもう、最終手段に訴えるしかないよな？

俺はホースケ先輩の脚を抱え上げ、大きく開脚させた。昨夜の行為で酷使され、まだぶっくりと腫れぼったいナルが露わになる。両脚を肩に担ぐと、ベッドに転がったままのローションを取ってそこに擦り付けた。戦闘準備を整えた砲口をぴたりと突きつけると、そのまま上体を倒し込んで奴の耳元に最終宣告を告げる。

「おいホースケ、今すぐ起きねえとこのままブチ犯すぞ、いいのかよ？」

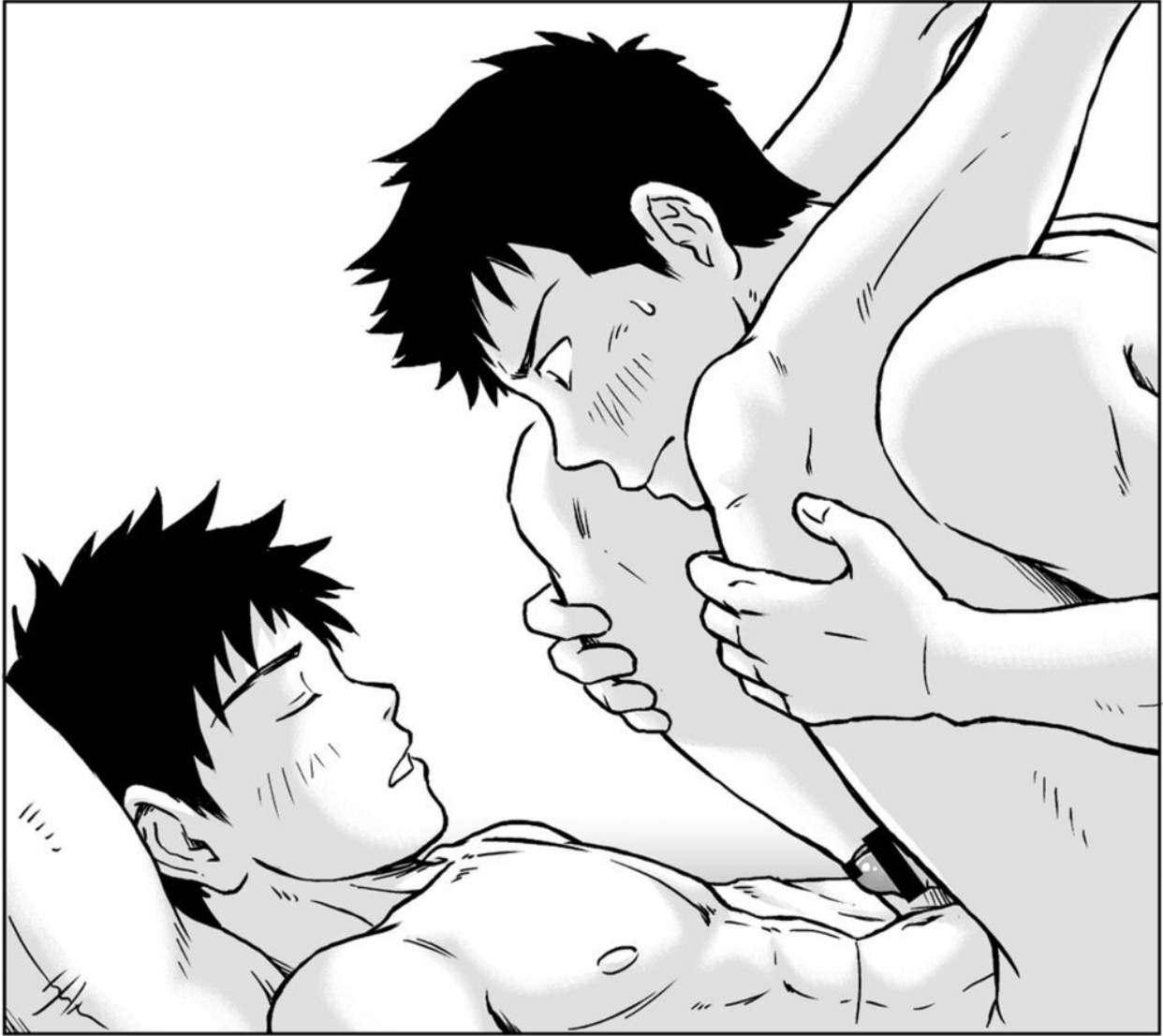
先輩は夢うつつのままウンウンと頷いた。

この野郎、寝ぼけたフリして本当はとっくに起きてるやがるんじゃないのか？　だがまあいい、意識が有ろうと無かるうと、とにかくそっちがOK出したんだからな。さっさと起きなかつた事をたっぷり後悔させてやるぜ！！

「早く目を覚ませよ、この寝坊すけ野郎」

俺はそう呟くと、目覚めの一撃を彼の中深くへと突き挿れてやるのだった。

(おわり)



早く目を
覚ませよ、

この寝坊すけ
野郎——

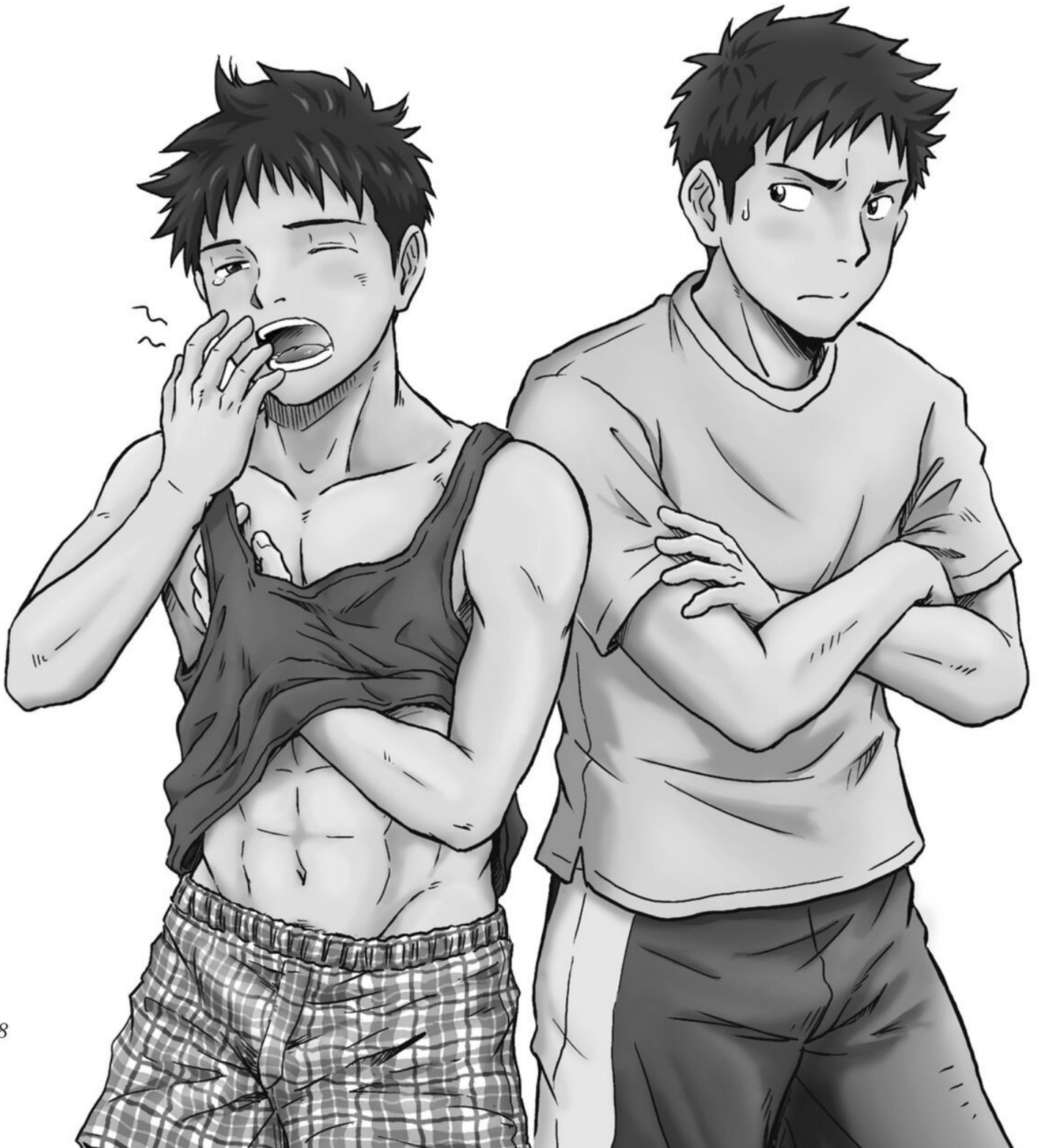
奥付

◆ 発行日：2019年8月23日

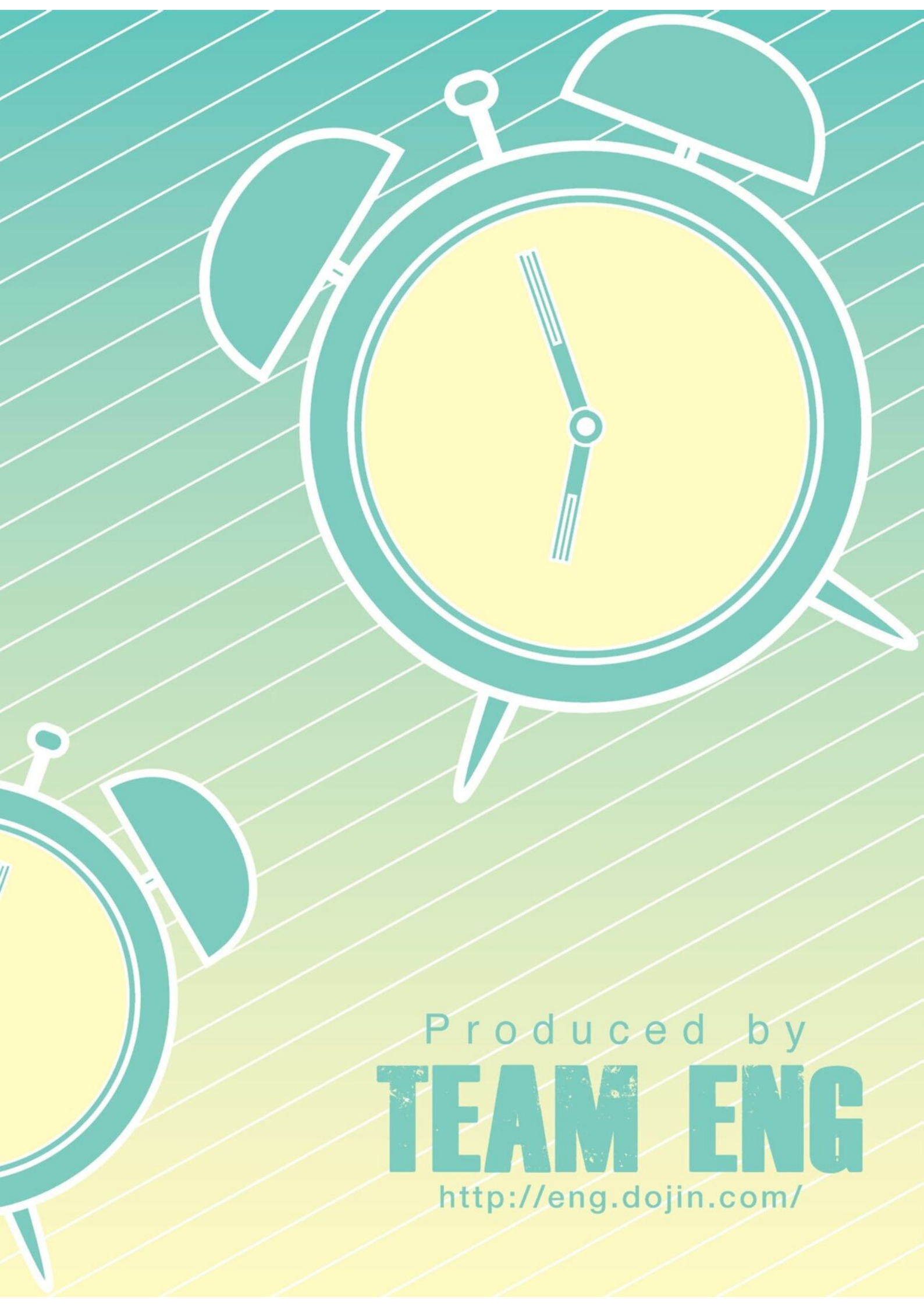
◆ 発行元：Eng

URL▷<http://eng.dojin.com/>

MAIL▷engacho69@gmail.com



- ※ 本作の内容は成人向けとなっております。未成年への譲渡・貸与等はやさらないようお願いします。
- ※ 個人での利用目的以外の複製・二次頒布・インターネット上へのアップロード行為は、著作権の侵害となり罰せられます。
- ※ 本作品はフィクションです。作中に使用された名称等は、実在の個人・企業・団体等とは一切関係ありません。



Produced by

TEAM ENG

<http://eng.dojin.com/>